

文部科学省 平成 26 年度  
「課題解決型高度医療人材養成プログラム」採択事業



# 山形発・地元ナース養成プログラム 平成 30 年度 活動報告書

公立大学法人山形県立保健医療大学

# 目 次

## 挨拶

I. 事業概要	1
II. 活動報告	
1. 学士課程教育	4
2. リカレント教育	12
3. 人事交流	28
4. 看護研究相談・支援	33
5. ICT活用	38
6. 事業普及	39
7. 看護実践研究センター	40
8. 事業推進・評価	43

## 資 料

- ・ 公立大学法人山形県立保健医療大学「地元ナース養成プログラム事業」  
推進委員会規程
- ・ 山形県立保健医療大学看護実践研究センター運営規程
- ・ 山形県立保健医療大学看護実践研究センター委員会要綱
- ・ 平成30年度 事業推進委員会・看護実践研究センター運営委員会名簿



## 平成 30 年度活動報告書の発行にあたり

事業推進代表者

山形県立保健医療大学理事長兼学長 前田 邦彦

「山形発・地元ナース養成プログラム」事業の遂行につきましては、学内・学外を問わず、多くの皆様のご支援を賜り、ここにあらためて感謝申し上げる次第です。

本事業は、山形県のように、超高齢化と人口減少が進む一方で、公共交通機関や医療・福祉機関等の資源が限られた地域の住民の、健康と QOL の向上に寄与するために、「地元ナース」を養成していこうとする取組みです。この「地元ナース」は、専門的な知識・技術だけでなく、利用者や地域住民の広範な健康問題、あるいは多様なニーズに幅広く対応できる総合力・実践力を身に着けた看護師と規定していますが、本事業の構想を論議しているときに様々な意見の中から生み出された概念です。「地元ナース」の「地元」は、その土地で生まれ育ったという意味ではなく、地域に根ざしたという意味を込めておりますので、「地元ナース」には、単に総合的な知識や技術を有する看護師というだけではなく、地域社会への係わり合いを重視した新しい保健医療専門職としての意味合いが込められております。

本事業は、平成 26 年度に文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」の中の「地域での暮らしや看取りまで見据えた看護が提供できる看護師の養成」事業の一つとして採択されました。本年度は、当初申請いたしました 5 年間計画の第 5 年度(最終年度)にあたります。本報告は、この第 5 年度目(平成 30 年度)の本事業の活動内容を総括し、広くご紹介するためにまとめました。

本事業は、その活動が、学士課程教育、リカレント教育、人事交流、看護研究相談支援、ICT 活用などの事業分野に分かれており、看護職をめざす学生、実際に従事している看護職等の皆様、および小規模施設の運営担当の皆様などに多段階の働き掛けをおこない、「地元ナース」の育成および普及をはかっております。本年度は、計画の最終年度となり、各事業分野の体制構築の確認や見直し、分野相互の有機的な連携とともに、今後、本事業をどのように維持・発展させていくかということも視野に活動が行なわれました。

本事業は、本県のような実情を抱えている地域だけではなく、ひろく全国における諸々の保健・医療・福祉の問題に対する解決策の一助にもつながると期待されております。来年度以降は、文部科学省の補助事業ではなく、本学独自の事業として、これまでの取り組みを継続していくとともに、その成果をひろく発信し、さらに内容の一層の充実をはかっていきたいと考えております。本事業のさらなる充実のために、本報告書をご一読の上、ご指導・ご鞭撻をいただければ幸甚に存じます。

(平成 31 年 2 月 25 日記)

## I. 事業概要

山形発・地元ナース養成プログラムは、平成30年度で文部科学省の課題解決型高度医療人材養成プログラムの補助金最終年度である5年目を迎えた。主な事業である、①学士課程教育、②リカレント教育、③人事交流、④看護研究相談・支援、⑤Information and Communication Technology; ICTの活用、の成果についてはそれぞれの報告を参照されたい。本稿では、補助金最終年度で明らかになりつつある「各事業の連関・発展」と補助金終了後の事業予定を中心に報告する。

### 1. 山形発・地元ナース養成プログラムの各事業の連関・発展

#### 1) 学士課程教育の実習とリカレント教育、人事交流の連関

小規模病院等看護職の学び直しを目的とするリカレント教育においては、目標の一つとして「リカレント教育修了者が地元ナースのロールモデルとしての役割を担い実習を展開する基盤を形成」することがある。人事交流では「小規模病院等看護職の大学教育への理解の促進」が掲げられている。

リカレント教育や人事交流に参加した看護職が在職する小規模病院等の実習展開は、平成27年度から試行し平成28年度から本格化した。今年度は下記のように拡充した。

①小国町立病院における総合看護学実習Ⅰ・成人慢性期看護学領域における地元医療福祉コース実習：小国町立病院では従来の病院実習の枠を超え、町立病院・訪問看護ステーション、介護老人保健施設、健康管理センター、まちかど医療相談室、等をフィールドとした実習が行われた（4年次生1名）。学生は高齢化と人口減少が進む地域の実態を体験し、町立病院が町民の当たり前の生活を支えていることを理解できた。その経験は地元ナースフォーラムで報告された<sup>1)</sup>。

②公立高島病院における総合看護学実習Ⅰ・在宅看護学領域における地元医療福祉コース実習：公立高島病院では退院支援や地域包括ケア病棟の多職種連携をテーマとする4年次生2名を受け入れ、外来・急性期病棟・地域包括ケア病棟・療養病棟、訪問看護ステーション、リハビリや栄養部門等を体験できる実習を展開した。また、同病院では、院内外の連携や小規模病院の役割等の内容について学生と一緒に新人看護師も学ぶプログラムを計画し、学生・新人看護師双方が成長する成果を得ている<sup>2)</sup>。

③川西湖山病院における総合看護学実習Ⅰ・在宅看護学領域における地元医療福祉コース実習、成人慢性期看護学実習：川西湖山病院では4年次生の総合看護学実習Ⅰのみならず、平成30年度から3年次生の成人慢性期看護学実習も開始された（3年次生2名・3週間×3クール）。同病院の実習指導者はリカレント教育で得られた知識や技術を実習に活かすことができたとの達成感を得ていた。また、川西湖山病院の看護師は、学士課程におけるジェネラリズム看護論（科目担当者：遠藤和子教授）の講師として授業にも参加している。リカレント教育や人事交流での学びと実習の実施、授業での講師活動が往還する経験については、川西湖山病院看護師が本学教員と共同で第45回山形県公衆衛生学会において発表した<sup>3)</sup>。

#### 2) リカレント教育から自病院での研修会企画への発展

最上町立最上病院では、リカレント教育である「小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム」とその後の「フォローアップ研修」を受講した看護師が中心となり、自病院での研修会を企画・実施した。研修

会内容はフィジカルアセスメントと急変時対応・CPRトレーニングであり、シミュレーターは山形県立保健医療大学から貸し出した。町立病院が地域の中核施設であることを意識し、町内の施設看護職へも門戸を広げ、病院看護職21名・施設看護職3名の参加を得た<sup>4)</sup>。

- 1) 五十嵐崇登：総合 I ・地元医療福祉コース実習の経験と学び。地元ナースフォーラム（2018年10月27日・山形県立保健医療大学）
- 2) 長岡喜陽、寒河江純子、高橋由美、竹田和美、佐藤志保、菅原京子：山形発・地元ナース養成プログラムを活用した小規模病院看護師の人材育成。第45回山形県公衆衛生学会講演集p. 7, 2019
- 3) 大淵愛、若山歩美、舟山美穂、遠藤和子、山田香：地元ナース養成プログラムと学士課程で教えることの往還ー今後の課題と展望ー。第45回山形県公衆衛生学会講演集p. 3, 2019
- 4) 遠藤由美、菅智美、荘司修子、岡崎美由紀、田室貴規、伊藤由美、藤井真由子、遊佐かおり、岡本和枝、有路亀代永、井上京子、高橋直美、佐藤志保：山田香：地元ナース養成プログラム受講を生かした小規模病院等看護職対象の現任教育企画と実施。第45回山形県公衆衛生学会講演集p. 5, 2019

## 2. 山形発・地元ナース養成プログラム事業推進委員会

本事業の推進において、「山形発・地元ナース養成プログラム事業推進委員会」は、文部科学省補助金事業内容を協議し実行に移す上で非常に重要な委員会である。

今年度も大学の委員会として、毎月、開催した。毎回、事業推進代表者である学長も出席し、課題解決型高度医療人材養成プログラムに大学として責任を持つことを担保している。

## 3. 今後に向けて

文部科学省の課題解決型高度医療人材養成プログラムの公募要領では、「補助事業終了後も、各大学において事業を継続的に実施できる教育プログラム等を構築すること」が明記されている。一方、財政的制約もあるなかで、どのように事業を継続していくべきか、継続できるかは、本事業開始時点からの重要な検討課題であった。今年度に至るまで、大学の設置主体である県はもちろん関係機関と様々な協議を重ねてきた。結果として、補助金終了後も大学事業として継続していくことが可能な体制を確保することができた。大学と関係機関の努力と同時に、山形発・地元ナース養成プログラムを受講する学生や小規模病院看護職の成長があったからこそ、といえる。次頁に今後の事業予定を示すので参照されたい。

少子高齢社会で人口減少も予想されている山形県の地域性は、複雑多岐に渡る多様な課題を抱えている。しかしながら、地域包括ケアの観点からみると、山形県は全国の先進地であるとも捉えることができる。山形発・地元ナース養成プログラムの今までの事業成果、そしてこれからの成果を地方各地に広げる努力を続けていきたい。

文責 事業推進責任者 菅原京子（看護学科教授）

## 山形発・地元ナース養成プログラムの再構築

(現行)

(再構築)

タイトル	「山形発・地元ナース養成プログラム」		山形発・地元ナース養成プログラム事業推進委員会
学士課程教育	地元論 ジェネラリズム看護論 相互理解連携論 地元医療福祉を強化した実習	教育推進委員会	
リカレント教育等	小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム		
	フォローアップ研修		
	看護up to date		
	Jナースカフェ		
看護研究相談・支援	看護研究相談・支援		
人事交流	大学→病院 病院→大学		
ICT活用	民間汎用サービスを使ったICT活用		
協力病院	協力病院		
会議体	人事交流評価会議		
	事業報告会		
	外部評価委員会		
成果公表	学会発表・論文		
	Jナース通信		
	事業報告書		
ホームページ	専用ホームページ		
文部科学省	各種報告		
予算	文科省補助金+大学		
センター	看護実践研究センター 専任：教員1、職員2	センター委員会	
	センター運営委員会		
	センター実施委員会		



「山形発・地元ナース養成プログラム」名称存続			
地元論 ジェネラリズム看護論 相互理解連携論 地元医療福祉を強化した実習			教育推進委員会
履修証明プログラム60時間で組み直す、看護研究の充実	料金	地元ナース事業推進部	看護実践研究センター運営委員会
ブラッシュアップの組み直しと併せて検討する。	料金		
診療所の看護を支援する形が整いつつある。今後1年間は継続。	料金		
小規模病院等看護師による自主運営に。研究報告等の内容も。			
相談・支援の定型的パターンを提示する。それ以上の内容の場合は教員兼業で扱う。	料金	向上部	教育力
形が見えつつあるので、今後2年間は、様々なことを試してみる。名称は「相互交流」		事業推進部	地元ナース
ICT準備と当日操作により遠隔地受講や実習指導が可能となっているので、継続。		推進部	地域連携
協定の更新		推進部	地元ナース事業
人事交流評価会議を協力病院会議に改組、幅広い内容を扱う。			
廃止			
地元ナース懇談会：外部評価の視点の継続			各部
何らかの形を作って継続する。		推進部	地域連携
看護実践研究センター通信・報告書に衣替える。			
大学ホームページへ移行・充実			大学
対応できるスケジュール管理			
大学予算+受講料金			
看護実践研究センターで継続。メンバーは学長任命。看護学科と事務局職員の全員兼務の予定。			
改訂			

## II. 活動報告

### 1. 学士課程教育

#### 1) 講義・演習

新設科目として「地元論」、「ジェネラリズム看護論」、「相互理解連携論」を開講

##### (1) 地元論

開講時期：1年通年      単位数：1単位      時間数：15時間      履修学生数：59人

授業概要：“地元”の概要を理解し、学生個々人の“地元”に対する理解と愛着を深め、“地元”で働き、“地元”を創造していく重要性を教授する。

月日	授業項目	学習内容・学習方法	担当
6月4日(月) 4限目	“地元”を概観する	“地元”の用語に関連する概念 “地元”が注目される背景・地元をどのように考える	後藤順子
7月・8月・2月 (各2こま)	“地元”の医療機関の見学(地域医療体験セミナー)	“地元”の生活に密着した医療を知る(山形・庄内・最上・置賜地区の医療機関6か所)	後藤順子
夏休み中の 1日	自分の“地元”を“をしる	夏休み中に自分の地元を振り返り特徴を記述する(課題学習)	後藤順子
12月6日(木) 3限目	“地元”で働くこと	私が“地元”で働くことの意義と“地元”の特徴(助産師・看護師)	後藤順子 スポット講師
12月13日 (木) 3限目	“地元”で働くこと	私が“地元”で働くことの意義と“地元”の特徴(保健師)	後藤順子 スポット講師
12月20日 (木) 3限目	“地元”を語る	自分の“地元”を選び、“地元”で生活する(生きる・活きる)ことの重要性をまとめる	後藤順子
1月10日(木) 3限目	“地元”を創造していく	“地元”の現状から、より豊かに創造していくすべを探る	後藤順子
1月17日(木) 3限目	私にとって“地元”とは/まとめ	自分の“地元”を選び、“地元”で生活する(生きる・活きる)ことの重要性をまとめる	後藤順子 スポット講師

### 成果

学生の感想から、全体を通して、人が生活するとは何か、その生活をする場には何が必要かなどについて考察を深めていることがうかがえた。当初、学生にとって“地元”とは、これまで生まれ育ってきた場所をイメージすることが多かったが、講義終了時には、“地元”について、学生それぞれは自分の言葉で表現できていたことから、“地元”の概念を理解できたと考える。

当初、学生の卒業後の就職先のイメージとして、急性期病院、大規模病院、都市部等が挙げられていた。外部講師からレクチャーを受けることと地域医療体験セミナーを体験することで、看護職の多様な働き方や医療機関等の役割について学ぶとともに、“地元”で働くことについて広く考えることが出来るようになった。



“地元”で働くこと

看護師の立場から



助産師の立場から



保健師の立場から

## (2) ジェネラリズム看護論

開講時期：2年通年 単位数：1単位 時間数：15時間 履修学生数：12人

授業概要：地域の保健医療水準の向上に貢献できる地元ナースとしての活動の基盤形成につながるように、人々の多様な健康問題及び看護へのニーズの献土を概観し、地方の小規模病院・診療所、高齢者施設等の場において、求められる看護について探求する。

月日	授業項目	学習内容・学習方法	担当
6月21日(木) 2限目	ジェネラリズム看護論とは	ジェネラリズムとは ジェネラリズム看護論の概観	遠藤和子
6月28日(木) 1・2限目	地方に暮らす人々の健康問題とニーズ	パネルディスカッション 「生活をみるとは」 ・看護学、社会学、理学療法学・作業療法学、 社会福祉学などを基盤とする専門家による、 職種間の視点の類似と相違	遠藤和子 丹野克子 山田香 スポット講師
7月4日(水) 3限目		パネルディスカッションを受けて検討会 ・地方に暮らす人々の健康問題と生活をみる 看護の視点 ・求められる看護の現状と課題	遠藤和子
11月7日(木) 3限目	看護に期待されているジェネラリストとしての活躍の場とニーズ	ニーズへの対応 方法と協働	遠藤和子
11月14日(水) 3・4限目		ディスカッション 「外来や地方の小規模病院や診療所で求められる看護活動の実際」	遠藤和子 スポット講師
11月21日(水) 3限目	ジェネラリズム看護の展望	地元住民が頼りにする看護師像とは	遠藤和子

## 成果

学生の感想では、昨年同様に、職種間の視点の類似と相違があること、多面的に捉える必要があること、その中で看護が期待されるニーズの考察を深めていることがうかがえた。

また、医療資源の乏しい地域や自分の地元で、地元住民の多様な健康問題に対して、創造的に看護することや、家族・地域を巻き込んだ活動として、様々な機関と協働連携することの重要性を理解できた



と考える。

人事交流事業で大学に派遣された小規模病院の看護師が、学生の討議を中心に2回参加した。学生の素直なディスカッションが、小規模病院で働く看護師の自己開示につながり、その看護師の自己の内面の変化を含めた体験の語り、リアルであるがゆえに学生ひとりひとりの描く看護師像を鮮明にしてゆくことを手助けした。学生と現場の実践者との正直なやり取りが学生の理解を深めることに効果があったと考える。



パネルディスカッションの様子

『生活をみるとは』

『外来や地方の小規模病院や診療所で求められる

看護活動の実際』

### (3) 相互理解連携論

開講時期：2年後期      単位数：1単位      時間数：15時間      履修学生数：60人

授業概要：個人、集団、地域等の「連携」の基礎や実際について、とくに「相互理解」を中心に、保健医療福祉分野以外にも含めて広く学習し、近年の保健医療福祉の分野で推進される「多職種連携協働（チーム医療）」に適応できるような能力、技術、考え方を教授する。

月日	授業項目	学習内容・学習方法	担当
12月4日(火) 3・4限目	授業ガイダンス 相互理解の基本	相互理解とは何か (講義・演習) ・相手を理解する ・自分を理解する 相互理解を深めるために必要なこと	前田邦彦 井上京子 佐藤志保
12月11日(火) 1・2限目 3・4限目	連携をすすめる上で 必要なスキル1	医療コミュニケーション・ファシリテーション (講義・演習) ・対話を通じたヘルスプロモーション ・アサーティブ・コミュニケーション ・コーチング ・ファシリテーション など	井上京子 佐藤志保 スポット講師
12月18日(火) 1・2限目	連携をすすめる上で 必要なスキル2 まとめ	情報の共有によるコラボレーション グループにおける自分の役割 自己評価	井上京子 佐藤志保

## 成果

学生のレポートには、自分の考えを伝え、相手の考えや気持ちを理解することの重要性を学ぶことができたという記載が多く、授業目的に沿った成果が得られたと考える。



講義の様子 『相互理解とは何か』



『医療コミュニケーション・ファシリテーション』

## 2) 小規模病院等での実習

(1) 総合看護学実習Ⅰ 地元医療福祉コース (地元ナース)

開講時期：4年前期 単位数：2単位

### ①成人看護学慢性期領域

施設名	学生数	内容	備考
川西湖山病院	3人	病棟、併設する介護老人保健施設、グループホーム 訪問診療に同行	リカレント教育修了8人 人事交流参加4人
小国町立病院	1人	地域包括ケア病棟、一般病棟、併設する老人保健施設 訪問看護に同行、「まちかど看護相談室」見学 他大学医学部生との合同研修	リカレント教育修了5人 人事交流参加4人

### ②在宅看護領域

施設名	学生数	内容	
公立高島病院	1人	地域包括ケア病棟、急性期病棟、訪問看護部門 リハビリテーションスタッフとの同行訪問事例検討会に参加	リカレント教育修了6人 人事交流参加3人
本間病院	1人	地域包括ケア病棟、急性期病棟、訪問看護部門	
鶴岡協立病院	1人	地域包括ケア病棟、急性期病棟、訪問看護部門	

## (2) 領域別実習

開講時期：3年後期 単位数：3単位

成人慢性期看護学実習

施設名	学生数	内容	
川西湖山病院	6人	一般病棟で、慢性的な健康障がいをもつ対象者に対する看護実践	リカレント教育修了8人 人事交流参加4人

## 成果

### (1) 総合看護学実習 I

平成30年度から、総合看護学実習 I に地元医療福祉コース（地元ナース）を選択コースの1つに位置付け、他のコースと同様に学生の希望をとり学生を配置した。このコースの実習施設となった5つの小規模病院のうち、川西湖山病院、小国町立病院、公立高島病院は、リカレント教育修了生や人事交流参加看護師のいる小規模病院である。

試行として行った昨年度は、リカレント教育修了生のいる小規模病院で実習した学生は3施設で実4人であったが、今年は3施設で実5人と受け入れが広がった。

いずれの施設でも、学生は、看護師が医療施設から地域に出向き健康相談をしながらアセスメントし、その場で健康教育の実施という、地域住民の健康を保持増進する看護の役割を理解した。また、施設と在宅の連携と継続の実際を理解を深めた。さらに、規模は小規模でありながら地域のニーズに合わせ多様な機能を果たして地域住民の健康を包括的に守っている医療機関の役割や、それらの機能の連続性協働連携の実際を理解できた。

その地域出身の学生であっても、小規模病院の活動を初めて知ったという感想を述べていた学生がいたことから、小規模病院の存在を学生に周知させる機会となったと考える。

### (2) 領域別実習

今年度、リカレント教育修了生のいる小規模病院で初めて3年生の領域別実習を行った。受け入れ体制に配慮いただき、リカレント教育修了生と人事交流で本学の成人慢性期看護学実習で研修した看護師が実習指導者として毎日学生を担当した。マンツーマンの指導により、学生の実習の満足度は高かった。特に、日ごろからスタッフが心がけている家族ケアを念頭においた「やさしい看護」と丁寧なケアを毎日繰り返すことを、直接指導を受け経験できたことは、日常生活援助の技術力の向上と、看護観の形成、患者さんの前に立つ心構えの醸成に効果的であったことが、実習最終面接やレポートに反映されていた。

### (3) 実習の成果と課題

リカレント教育修了生や人事交流に参加した看護師のいる小規模病院3施設で、4年生の総合看護学実習 I と、3年生の領域別実習を実施できた。大学から施設に実習を依頼したが、施設側からも実習を引き受けたいという意向が強かった。このように実習を積極的に受け入れていただけたことは、リカレント教育や人事交流事業の成果と考える。4年生の総合看護学実習 I と3年生の領域別実習では、学生の学習進度が異なり、実習目標や内容も異なる。人事交流で3年生の領域別実習の指導を見学した研修生とリカレント教育修了生が、本学の教育課程や学生の理解度をふまえ中心となって実習指導を担当し、学生は小規模病院の看護師が果たす役割を理解し、実習目標を達成できた。一方、実習を受け入れたことで、病院全体に刺激になったり、指導を担当した看護師が自信を持って

たという声を聞き、小規模病院やそこで働く看護師にとっても成果があった。大学と小規模病院双方に成果があり、好循環となったと考える。今後、リカレント修了生や人事交流に参加した看護師がいる施設に積極的に実習依頼を行っていききたい。

リカレント教育修了生のいる小規模病院は、大学から遠く、公共交通機関の便が悪い施設が殆どである。また、一施設当たりの実習受け入れが少人数に限られる。実習施設への通学を配慮した学生の配置や ICT の活用、宿泊施設の確保が必要と考える。ICT は、教員側から安否確認に有用であることと、他施設で実習をしているグループメンバーとのカンファレンスに有効である。現在の ICT 環境では、時間的な制約や位置的に電波状況が不安定なため、有効な手段を検討する必要がある。また、宿泊施設については、受け入れ施設側や学生の親族のご厚意に甘えている現状があり、実習謝金を含めて今後の検討課題としたい。

### 3) 今後の学士課程教育の検討

全学年を対象に、学年末に本事業の学士課程において目標とする内容について到達度の評価を行った。この到達度は、客観的なものではなく、あくまで学生の主観的な評価である。1年生は63人に配布し57人から回収、2年生は60人に配布し43人から回収、3年生は64人に配布し44人から回収、4年生は65人に配布し59人から回収した。(別紙1)

1年生から3年生の教育評価では、到達度が高い項目がある一方、やや低い項目があり、今後強化すべき課題が明確になった。初学者である1年生でも理解している割合が高かった。これは、客観的には、理解度が高いというより、関心の高さを反映していると考えられる。全般的に1年生に比べ3年生の方が到達度の評価が低かった。3年生は、自己の到達度をより客観的に自己評価できているのかもしれない。

4年生の教育評価は、1～3年生に比べ全体的に到達度が高かった。学士教育課程では、卒業時にすべての学生が「地元と考える場所で就業する価値を理解できる」ことが目標である。とても理解できた41人、少し理解できた16人、あまり理解できなかった2人、まったく理解できなかった0人であったことから、概ね卒業時の目標は達成できたと考える。

一つや二つの科目で、これらの評価項目が到達できるとは考えていない。今後もこれら3科目が効果的に積み上げられるよう、教育課程全体とのバランスを考えながら、卒業時の到達目標をふまえ、魅力ある内容となるよう精錬していく。

文責	看護学科長・教授	遠藤恵子
	看護学科教授	後藤順子
	看護学科教授	遠藤和子
	看護学科准教授	井上京子

## 平成 30 年度 1～3 年生の学士教育課程評価 1 年生 n=57 2 年生 n=43 3 年生 n=44

		とても できた	少し できた	あまり できなかった	まったく できなかった
1. 生活する場として、多様な地域があることを理解する	1 年生	48	9	0	0
	2 年生	31	12	0	0
	3 年生	24	17	3	0
2. 多様な価値観のもとに生活する場があることを理解する	1 年生	46	11	0	0
	2 年生	32	11	0	0
	3 年生	25	16	3	0
3. 生活する場の中に、健康で生活するための資源があることを理解する	1 年生	37	20	0	0
	2 年生	23	18	2	0
	3 年生	23	20	1	0
4. 人々が健康で安心して生活できる地域づくりのため看護職として貢献したいと考える	1 年生	48	9	0	0
	2 年生	27	16	0	0
	3 年生	23	18	3	0
5. 住民の健康維持の視点で、地域のもつ強みと弱みを捉える	1 年生	37	20	0	0
	2 年生	20	22	1	0
	3 年生	11	27	5	1
6. 地域の持つ健康課題を解決する看護の役割を考える	1 年生	34	22	1	0
	2 年生	20	21	2	0
	3 年生	14	26	4	0
7. 地域の持つ健康課題を解決するための多職種連携の方法を考える	1 年生	31	22	4	0
	2 年生	18	22	3	0
	3 年生	11	28	5	0
8. 地域の持つ健康問題を解決するために住民の力を活用する方法を考える	1 年生	25	22	10	0
	2 年生	19	23	1	0
	3 年生	8	26	10	0
9. 多様な地域で多様な価値観を持つ住民の健康を守る看護に関心を持つ	1 年生	41	15	1	0
	2 年生	31	12	0	0
	3 年生	14	25	5	0
10. 地域の住民の健康を守る看護に関する自分の意見をまとめて表現する	1 年生	20	28	9	0
	2 年生	15	24	4	0
	3 年生	8	21	14	1
11. 地域の住民の健康を守る看護の成果を、広く発信する方法を考える	1 年生	17	26	13	1
	2 年生	12	22	9	0
	3 年生	9	21	13	1
12. 多様な地域で多様な価値観を持つ住民の健康を守るため、今の状況の維持と変化の見極めが必要なことを理解する	1 年生	34	19	4	0
	2 年生	20	18	5	0
	3 年生	17	20	7	0
13. 立場の異なるもの同士が問題解決にむけ、相互に理解し合い関係性を促進する方法を理解する	1 年生	29	22	6	0
	2 年生	27	16	0	0
	3 年生	19	20	5	0
14. 人々が健康で安心して生活できる地域づくりに貢献するために社会情勢をふまえた看護や自分の役割を考える	1 年生	31	25	1	0
	2 年生	22	16	5	0
	3 年生	16	21	6	1
15. 人々が健康で安心して生活できる地域づくりに貢献するために、自分の課題を明確にする	1 年生	22	27	8	0
	2 年生	14	23	6	0
	3 年生	12	21	10	1
16. 人々が健康で安心して生活できる地域づくりに貢献するために、看護実践力の向上を目指し努力する	1 年生	37	16	3	1
	2 年生	22	16	5	0
	3 年生	21	19	3	1

平成 30 年度 4 年生の学士教育課程評価 n=59

	とても できた	少し できた	あまり できなかった	まったく できなかった
1. 生活する場として、多様な地域があることを理解する	51	8	0	0
2. 多様な価値観のもとに生活する場があることを理解する	52	7	0	0
3. 生活する場の中に、健康で生活するための資源があることを理解する	46	13	0	0
4. 人々が健康で安心して生活できる地域づくりのため看護職として貢献したいと考える	44	14	0	0
5. 住民の健康維持の視点で、地域のもつ強みと弱みを捉える	43	16	0	0
6. 地域の持つ健康課題を解決する看護の役割を考える	39	20	0	0
7. 地域の持つ健康課題を解決するための多職種連携の方法を考える	42	16	1	0
8. 地域の持つ健康問題を解決するために住民の力を活用する方法を考える	39	20	0	0
9. 多様な地域で多様な価値観を持つ住民の健康を守る看護に関心を持つ	45	13	1	1
10. 地域の住民の健康を守る看護に関する自分の意見をまとめて表現する	22	32	5	0
11. 地域の住民の健康を守る看護の成果を、広く発信する方法を考える	20	33	6	0
12. 多様な地域で多様な価値観を持つ住民の健康を守るため、今の状況の維持と変化の見極めが必要なことを理解する	45	12	2	0
13. 立場の異なるもの同士が問題解決にむけ、相互に理解し合い関係性を促進する方法を理解する	44	13	2	0
14. 人々が健康で安心して生活できる地域づくりに貢献するために社会情勢をふまえた看護や自分の役割を考える	36	21	2	0
15. 人々が健康で安心して生活できる地域づくりに貢献するために、自分の課題を明確にする	33	24	2	0
16. 人々が健康で安心して生活できる地域づくりに貢献するために、看護実践力の向上を目指し努力する	41	16	2	0
17. あなたが地元と考える場所で就業する価値を理解できる	41	16	2	0

## 2. リカレント教育

### 1) リカレント教育プログラム

平成 27 年度より実施した 120 時間のリカレント教育履修証明プログラム「小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム」について、内容を再検討してシラバス（別紙 2）を作成し、実施した。

#### (1) 履修証明プログラム「小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム」の実施状況

##### ①開講目的

小規模病院等の看護職が地元医療福祉の担い手として、その役割を再認識し発展的な看護を実践する能力の向上をはかり、実習指導力につなげることを目的とする。

##### ②開講科目

科目名	単元数（ICT 開講単元数）	時間数（時間）
看護の動向と課題	2（0）	12
根拠に基づく看護	11（8）	48
地域密着連携	4（3）	30
看護研究の基礎	4（2）	30
合計	21（13）	120

\*各項目を構成する単元は別紙 2「小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムシラバス」等参照

##### ③開講期間:平成 30 年 7 月 24 日（火）～9 月 27 日（木）<単元毎開講日>別紙 3 参照

##### ④受講者数：52 名

- ・全科目履修者数：8 名（病院：8 名）
- ・単元履修者数：47 名（30 年度で全科目を履修した 5 名を除く人数）

単元履修者の内訳

受講単元数	1	2	3	4～6	7～9	10～12	13 以上
人数	20	5	6	12	0	2	2

\*履修証明書交付者数：8 名（今年度全科目履修修了者 5 名+2 年間で全科目履修修了者 3 名）

##### ⑤ICT の利用状況

- ・履修者 52 名中、ICT を利用して受講した単元を有する者：37 名（71.2%）
- ・履修証明書を交付された者 8 名中、ICT を利用して受講した単元を有する者：4 名（50.0%）
- ・単元履修者 47 名中、ICT 利用単元数・・・99/169 単元（58.6%）
- ・単元履修者 47 名中、ICT のみを利用した履修者：26 名（55.3%）

#### (2) 履修証明書の交付

\*履修証明書は 2 年間で取得可能。（ただし、今年度は事業の最終年度につき、単年度での修了とした。）

本小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムは、学校教育法第 105 条に基づく「履修証明プログラム」として実施し、120 時間の講習を受講し修了要件を満たした者には、本学から同法の基づく「履修証明書」が交付される。今年度は、修了要件を満たした全科目履修者 8 名（昨年度から継続し、2 年間で全科目履修を修了した 3 名を含む）について、看護学科教員会議で審議の上修了を認定し、「履修証明書」を交付した。

### (3) リカレント教育プログラム評価

#### ①Minutes Paper による分析

受講生の講義への参加度、内容の理解度、満足度について、受講生による Minutes Paper の記載内容をまとめた。その結果を基に、次年度の小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムを検討する。

<小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム Minutes Paper の集計結果> 別紙 4

#### ②小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム終了後のアンケート調査

小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムの教育効果を経年的、数值的、客観的に測定・評価するために、終了時・3カ月後にアンケート調査を実施した。



開講式



フィジコを使用した演習



I C T活用の講義



I C T活用の演習



I C T活用でのグループワーク



閉講式



## 2) 小規模病院等の看護職を対象としたリカレント教育に関する学会発表

小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムやフォローアップ研修を通して得られた教育効果について、研究を実施し報告を行った。

学会名：第 38 回日本看護科学学会学術集会

開催地：愛媛県松山市

開催日：2018 年 12 月 15 日（土）～16 日（日）

演題名：「山形発・地元ナース養成プログラム」におけるリカレント教育効果  
—履修証明修了生の仕事観の変化—（発表者：佐藤志保）

<抄録> 別紙 5



## 3) フォローアップ研修

フォローアップ研修は、リカレント教育の一環として、小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムの履修証明修了生を対象に平成 28 年度より実施している。

### (1) フォローアップ研修の実施状況

今年度の研修対象者は、平成 28 年度履修証明修了生でフォローアップ研修未参加者 1 名と、平成 29 年度履修証明修了生 11 名の計 12 名であった。そのうち、フォローアップ研修への参加者は 7 名であった。

#### ①フォローアップ研修の目的

- ・小規模病院等で展開する看護学実習やスタッフ教育を実施できる企画力と調整力を養う。
- ・小規模病院等における看護学生や新人看護師・スタッフへの指導力を培う。
- ・発展的な看護を実践する能力の向上を図る。

#### ②研修日程と内容

- ・開催期間：平成 30 年 6 月～12 月（8 日間）
- ・研修内容

##### 【指導力スキルアップ研修】

学習内容：「根拠に基づく看護」をテーマとした研修会の企画・実施・評価

学習方法：自施設で展開するスタッフ教育の展開（グループワークおよび実施）

##### 【看護研究ステップアップ研修】

学習内容：研究計画書の作成、研究方法の実践、研究のまとめと発表

学習方法：演習を通して看護研究のプロセスを展開

##### 【地元医療連携ステップアップ研修】

学習内容：連携をすすめる上で必要なスキル（ファシリテーション等）

学習方法：学部学生の講義や演習に参加

(2) 研修内容の概要

・研修日程

回	月日	1 限	2 限	3 限	4 限
1	6/6		看護研究	看護研究	指導力
2	6/20		看護研究	看護研究	指導力
3	7/4		看護研究	看護研究	指導力
4	7/18	指導力			
5	10/3		看護研究	看護研究	看護研究
6	10/17		看護研究	看護研究	看護研究
7	10/31		看護研究	看護研究	看護研究
8	12/11	地元医療連携			

① 指導力スキルアップ研修

研修生の施設の新人及び3年目の看護師を対象とした「やってみよう！フィジカルアセスメント」を企画した。研修内容はフィジカルアセスメントで、フィジコを使用して実施し、終了後に評価を行った。フォローアップ研修生も、実施した研修会の参加者も、複数の病院に所属しており、この研修会を機会に交流を深めていた。



② 看護研究ステップアップ研修

昨年度の小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム「看護研究の基礎」で作成した研究計画書を基に、研究を進めた。7～9月に調査を実施し、10月に結果を発表した。



### ③ 地元医療連携ステップアップ研修

連携をすすめる上で必要なスキル（ファシリテーション・コーチング等）について、学部学生と共に講義や演習に参加し学習した。



### (3) 総括および今後の課題

今年度も昨年度と同様に、研修目標を踏まえ、ブラッシュアッププログラムをさらに深める研修を実施した。研修生が主体的に企画し、計画を進めるような研修内容にしており、また実際に現場で活用できる研修が行えたので、目標が概ね達成できたと考える。

フォローアップ研修においても、研修生や実施した研修会の参加者も同じような規模や環境の医療機関に所属しているので、この研修会を機会に交流を深めていた。

今後はこれまでの成果を活かし、研修生が主体的に取り組むことができ、職場に還元できるような内容の研修を企画し、また、研修生や研修会の参加者が交流を図る機会にもなるような、場の提供に地域における医療機関の連携に

\*研修生の意見・要望等（抜粋）\*別紙6参照（平成30年度 フォローアップ研修実施報告）

文責 看護学科准教授 井上京子

看護実践研究センター特任講師 佐藤志保

## 平成 30 年度 小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムシラバス

## ＜開講目的＞

小規模病院等の看護職が、地元の医療福祉の担い手としてその役割を再認識し、発展的な看護を実践する能力の向上を図ることを目的とする。

科目	看護の動向と課題	科目担当者	沼澤さとみ 佐藤志保	
授業形態	講義	時間数	12時間＝90分×8回【6時間（4回）×2日間】	
授業概要	1. わが国の看護や看護教育の変遷と現状、今後の展望と課題等について学ぶ 2. 自己の看護体験のリフレクションや講義を通して、看護について考える機会とする			
授 業 計 画				
回	単元	学 習 目 標	内 容	担当
1	看護の動向と課題Ⅱ	1. 看護教育制度の変遷から多様性と複雑さを理解する	看護教育制度の変遷	沼澤さとみ
2		2. 看護基礎教育の現状と課題を理解する	看護基礎教育の現状と課題	
3		3. 看護教育課程の特徴を理解する	看護教育課程の特徴 ・指定規則からみた教育課程	
4		1. 能力（コンピテンシー）を重視したカリキュラムの考え方の変化について理解する	教育課程をめぐる最近の動向 ・能力(コンピテンシー)を重視したカリキュラム	
		2. 学生が身につけるべき能力について考えることができる	・社会人基礎力、学士力	
		3. 最近の教育方法について理解する	能力育成のための教育方法	
5	看護の動向と課題Ⅰ	1. 看護の専門性について理解する	看護の専門性	菅原京子
6		2. 看護が完全プロフェッションとなる上でクリアすべき課題について理解する	・専門職とは ・専門職としての看護	
7		3. 自分自身の看護の専門性について考える	変化している看護	
8		4. 今日の医療と看護の変化について理解する	・疾病中心からヘルスプロモーションへ ・施設内看護～地域基盤看護へ	
		5. 看護の社会的責務について考える	・チーム医療の推進と専門職等の役割分担 ・特定行為	
		6. 変化している看護において自らが果たすべき役割を討議する		
		1. なぜ「看護とは何か」という問いが必要なのかを理解する	看護とは何か ・看護の原点、語源、哲学的な思考の必要性	沼澤さとみ
		2. 看護を構成する概念、看護理論家が考える看護について理解する	看護を構成する概念 看護理論家が考える看護	
		3. 自分自身の看護に対する考えについて他者と討議できる	・ナイチンゲールの看護理論 ・ヘンダーソンの看護理論 ・ケアリングの概念 看護経験のリフレクション	
評価方法	レポートまたは授業への参加度、ミニツツペーパーに基づき総合的に評価			

科目	根拠に基づく看護	科目担当者	高橋直美 佐藤志保	
授業形態	講義・演習	時間数	48時間＝90分×32回【6時間（4回）×8日間】	
授業概要	1. 講義や演習を通して看護実践の根拠を明確にし、既存の知識との統合を図る 2. 根拠に基づく知識と技術を確認する機会とする			
授 業 計 画				
回	単元	学 習 目 標	内 容	担当
1	看護過程	看護過程を改めて学習することで、対象に最もふさわしい	看護過程とは 事例を用いた看護過程の 展開	高橋直美
2		看護を提供するための考え方を再確認する		
3				
4				
5	フィジカル アセスメント	フィジカルアセスメント及びその基本技術について理解する	フィジカルアセスメントとは フィジカルアセスメントの基本技術	沼澤さとみ
6		対象者の消化器系を把握するため基本となるフィジカルエグザミ ネーションの方法を理解し、実施できる	消化器系のフィジカルアセスメント	半田直子
7		対象者の呼吸器系を把握するため基本となるフィジカルエグザミ ネーションの方法を理解し、実施できる	呼吸器系のフィジカルアセスメント	
8				
9	災害看護	1.災害対応の原則である CSCA を理解する	災害看護とは トリアージの基礎知識	高橋直美
10		2.災害時の病院の受入れ体制の構築を理解する 3.災害に備えて、日頃から準備しておくべきことについて理 解する		
11	リハビリテーション の看護	1.自立支援につながるリハビリテーション看護について理解する	看護におけるリハビリテーション とは リハビリテーションの実際	赤塚清矢 中野渡達哉
12		2.関節拘縮の基礎を理解する 3.関節拘縮に対するリハビリテーション看護を実施できる		
13	高齢者の 看護	1.高齢者の特徴の理解を深めることができる	高齢者の特徴 高齢患者のケア	後藤 慶
14		2.高齢患者のケアの質を高めることにつなげることができる		
15	認知症の 看護	1.認知症高齢者の特徴を理解する	認知症高齢者の特徴 認知症高齢者のケア	吉澤理恵
16		2.認知症高齢者に起こる生活上の困難さを理解する 3.認知症高齢者の対応方法を理解し、実際の看護・ケアで実 践できる		
17	糖尿病の 看護	1.糖尿病の病態生理・治療・療養指導について理解する	糖尿病患者の特徴 糖尿病患者のケア	佐藤志保
18		2.高齢糖尿病患者の特徴と療養支援について理解する		
19	緩和ケアの 看護	1.緩和ケアの看護 1) ケアの概要が理解できる 2) 緩和ケアの実際が理解できる 3) 看護師の役割を理解し、ケアに活かすことができる	緩和ケアとは 緩和ケアの実際	齋藤春美
20		2.終末期の看護 1) 終末期に見られる患者の変化が理解出来る 2) 終末期の患者・家族への対応方法が理解できる 3) 看護師の役割を理解し、ケアに活かすことができる		

21	フィジカル アセスメント	対象者の循環器系を把握するため基本となるフィジカルエグザミ ネーションの方法を理解し、実施できる	循環器系のフィジカルアセスメント	高橋直美	
22		対象者の運動器系を把握するため基本となるフィジカルエグザミ ネーションの方法を理解し、実施できる	運動器系のフィジカルアセスメント		
23			1.事例患者の状況に応じたフィジカルエグザミネーションが実施できる 2.フィジカルエグザミネーションの結果から患者の状況をアセスメントし、患 者に提供すべき看護ケアを計画することができる		事例を用いたフィジカルアセスメン トの実践
24					
25	褥瘡ケアの 看護	1.褥瘡ケアの実際 1) 褥瘡評価方法を理解し、実施できる 2) 創傷治癒過程の基礎知識を身につける 3) 保存的治療について理解する 4) ポジショニングの方法、考え方を習得する 5) 基本的なスキンケア方法について理解し、実施できる 2.最新の褥瘡治療 1) 最新の褥瘡治療を知る	褥瘡のアセスメント 褥瘡ケアの実際	片岡ひとみ	
26					
27	摂食・嚥下の 看護	1.摂食嚥下障がいメカニズムを理解する 2.誤嚥予防目的の嚥下機能の評価と嚥下と栄養の関係につ いて理解する	栄養状態、摂食のアセスメント 患者の状態別援助の実際	梁瀬文子	
28					
29	急変時の 看護	急変に遭遇した際、看護師として患者を評価し、適切な救急 処置が実施できる	急変時の看護とは	峯田雅寛	
30			急変時のアセスメントと		
31			看護の実際		
32			事例から対応策を考える		
評価方法		レポートまたは授業への参加度、ミニッツペーパーに基づき総合的に評価			

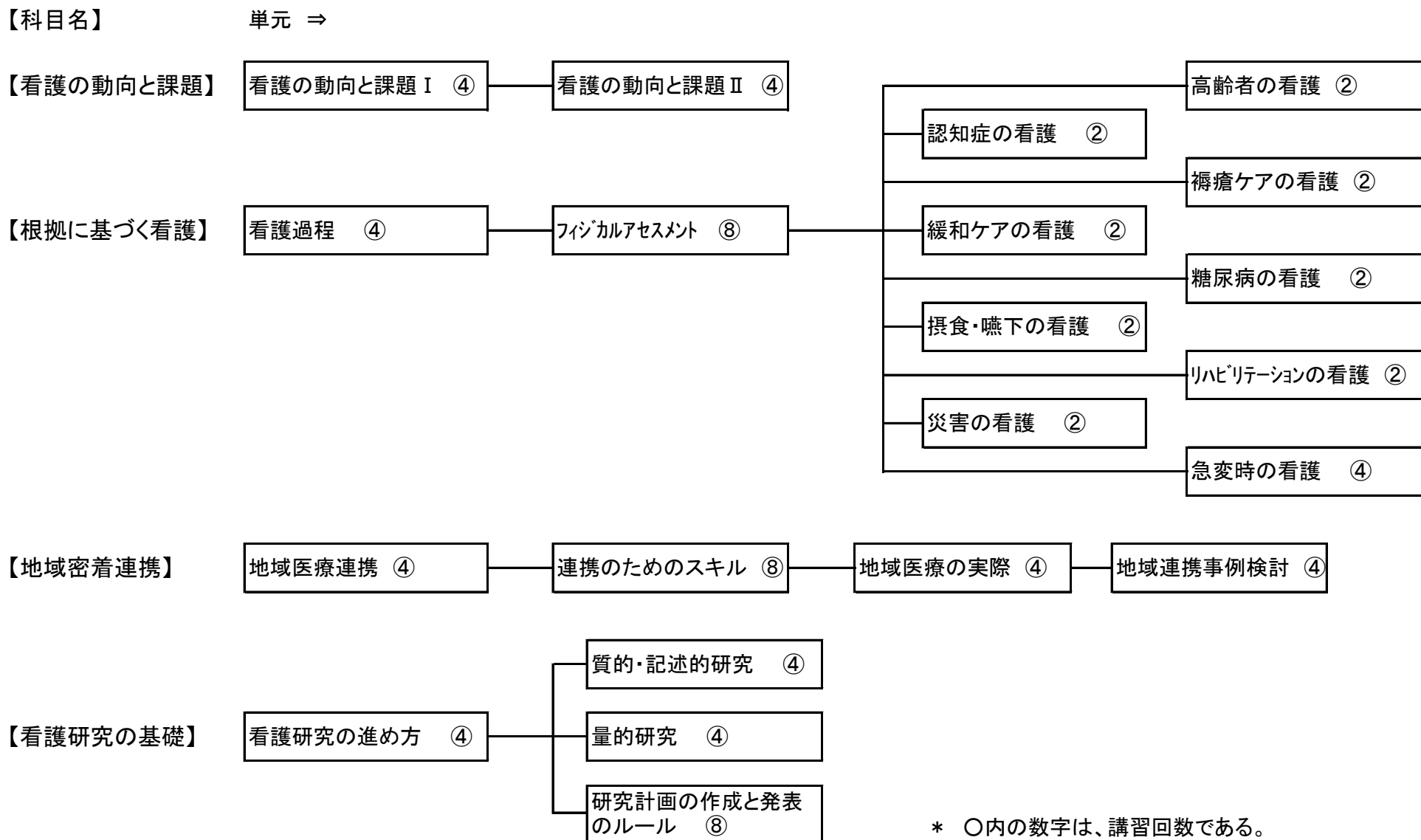
科目	地域密着連携	科目担当者	井上京子 佐藤志保	
授業形態	講義・演習	時間数	30時間＝90分×20回【6時間（4回）×5日間】	
授業概要	1. 地域医療連携の必要性やあり方を検討する 2. 地域包括ケアの現状と課題を抽出し、改善策を検討する機会とする 3. 連携をすすめるうえで必要な基本的スキルを習得する 4. 保健・医療等専門職および住民と協働して包括ケアを実践する方法を身につける			
授 業 計 画				
回	単元	学 習 目 標	内 容	担当
1	地域医療連携(1)	1.地域医療連携や医療従事者間連携の必要性を理解する	保健医療福祉における多職種連携 ・チーム医療：医師の立場から	前田邦彦
2		2.住民力を活用した地域医療連携のあり方を考える	地域医療連携について ・地域医療連携の必要性	菅原京子
3		3.地域包括ケアに関する基礎知識について確認する	・医療従事者間の連携 ・住民力の活かし方	
4		4.地域包括ケアシステムの実際を理解する	地域包括ケア ・地域包括ケアとは ・地域包括ケアシステムの構築 ・地域ケア会議の推進 ・地域の包括的な支援・サービス提供体制 (地域包括ケアシステム)の実際	
5	連携のためのスキル	1.連携を行ううえで、職種間の相互理解は不可欠の要素であることを理解する	連携をすすめる上で必要なスキル ・連携におけるマネジメント力・コミュニケーション力	塩野貴美
6			2.連携を進めるうえで必要な基本的スキルを理解する	
7		連携をすすめる上で必要なスキル ・連携におけるマネジメント力・コミュニケーション力		醍醐孝典
8		・ファシリテーションとは		
9		・ファシリテーションのスキル		
10		・ファシリテーターの役割		
11	地域医療連携(2)	1.地域医療連携や医療従事者間連携の必要性を理解する	地域包括ケア	菅原京子
12		2.住民力を活用した地域医療連携のあり方を考える	地域での課題を考える	井上京子 佐藤志保
13		3.地域包括ケアに関する基礎知識について確認する	保健医療福祉における多職種連携 職種間の協働―相互理解― 1) 作業療法とは	慶徳民夫
14		4.地域包括ケアシステムの実際を理解する	2) 理学療法とは	高橋俊章

17	地域医療の実際・地域連携事例検討	1.地域包括ケアの現状と課題を抽出し、改善策を考える	課題検討 ・地域の特性に応じた地域医療連携および地域包括ケアの現状と課題（プレゼンテーション） ・地域の特性に応じた地域医療連携および地域包括ケアの現状と課題（課題の改善策の検討）	井上京子 佐藤志保
18		2.連携を進めるうえで必要な基本的スキルを活用する		
19		1.事例を通して保健医療専門職及び住民と協働する包括ケアの実際を体験する	事例検討 ・事例（紙上患者）に対する地域包括ケアの検討	
20		2.連携を進めるうえで必要な基本的スキルを習得する		
評価方法		レポートまたは授業への参加度、ミニッツペーパーに基づき総合的に評価		



科目	看護研究の基礎	科目担当者	今野浩之 佐藤志保	
授業形態	講義・演習	時間数	30時間＝90分×20回【6時間（4回）×5日間】	
授業概要	1. 看護研究の意義を理解し、実践と研究を関連づけて捉える機会とする 2. 看護研究のプロセスを学び、研究計画書を作成する 3. 看護研究の講義や演習をとおして、理論的な考え方を身につける			
授 業 計 画				
回	単元	学 習 目 標	内 容	担当
1	看護研究の進め方	1.看護研究の意義を理解する 2.研究の過程を理解する 3.研究の様々なデザインを理解する	身近に感じる看護研究 ・研究とは何か・研究をする意義 ・実践における看護研究の位置づけ・研究デザイン	今野浩之
2		1.実践の中で感じる疑問や改善点を考えることができる	実践の振り返り ・実践の中で感じる疑問や改善点を考える（実践報告、事例報告を含める）	佐藤志保
3		2.研究に関心を持つことができる 3.研究テーマを見つけることができる	・これまでの看護研究について 文献検索一気になる事柄について文献を調べるー	
4		4.研究に主体的に取り組むことができる	・文献検索の目的や意義・医中誌他文献検索の実際 ・各個人で関心のある文献を2～3編程度選定する	
5	量的研究	1.量的研究を概観できる	・文献を読みながら量的研究の基礎を学ぶ	後藤順子 今野浩之
6		2.論文（量的研究）を読み、記述されている内容を理解する	・調査用紙の作成について学ぶ ・各々が選定した文献を読み込む	
7		3.アンケート作成の留意点を理解する	（クリティーク含む）	
8		4.自分の研究課題と質的研究の関連を考える		
9	質的・記述的研究	1.質的研究を概観できる	・文献を読みながら質的・記述研究の基礎を学ぶ	今野浩之
10		2.論文（質的研究）を読み、記述されている内容を理解する	・各々が選定した文献を読み込む	
11		3.自分の研究課題と質的研究の関連を考える	（クリティーク含む）	
12				
13	研究計画の作成と発表のルール	1.研究発表の意義を理解する	倫理的配慮の基本 ・看護研究における倫理の必要性和原則	遠藤恵子
14		2.学会発表に種類やその方法を理解する	研究計画書の作成 ・研究計画書に問われるもの、書き方等	後藤順子 井上京子 今野浩之
15		3.論文の投稿方法を理解する	・研究成に向けて個々に作業 ・発表（1人15分程度）、まとめ	
16			研究発表のルール ・研究発表の方法（学会・学術論文の書き方）、実践へのいかし方等まとめ	
17			実践にいかす看護研究のまとめ ・看護実践研究センターの利用について	
18				
19				
20				
20				
評価方法	レポートまたは授業への参加度、ミニツツペーパーに基づき総合的に評価			

## 小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム カリキュラムツリー



\* ○内の数字は、講習回数である。  
1回の講習は90分

## 平成30年度 ブラッシュアッププログラム 単元毎開講日

科目名	単元名	開講日	時間	講師	ICT	
[看護の動向と課題]	看護の動向と課題Ⅱ	7月24日(火)	9:00~12:10	沼澤 さとみ		
	看護の動向と課題Ⅱ		13:00~16:10			
	看護の動向と課題Ⅰ	7月26日(木)	9:00~12:10	菅原 京子		
	看護の動向と課題Ⅰ		13:00~16:10	沼澤 さとみ		
[根拠に基づく看護]	看護過程	7月31日(火)	9:00~12:10	高橋 直美		
	看護過程		13:00~16:10			
	フィジカルアセスメント	8月2日(木)	9:00~10:30	沼澤 さとみ		
	フィジカルアセスメント(消化器)		10:40~12:10	半田 直子		
	フィジカルアセスメント(呼吸器)		13:00~16:10			
	災害看護	8月7日(火)	9:00~12:10	高橋 直美		
	リハビリテーションの看護		13:00~16:10	赤塚 清矢・中野渡 達哉		可
	高齢者の看護	8月9日(木)	9:00~12:10	後藤 慶		可
	認知症の看護		13:00~16:10	吉澤 理恵		可
	糖尿病の看護	8月14日(火)	9:00~12:10	佐藤 志保		可
	緩和ケアの看護		13:00~16:10	齋藤 春美		可
	フィジカルアセスメント(循環器)	8月16日(木)	9:00~12:10	高橋 直美		
	フィジカルアセスメント(運動器)		13:00~14:30			
	フィジカルアセスメント(事例)		14:40~16:10			
	褥瘡ケアの看護	8月21日(火)	9:00~12:10	片岡 ひとみ		可
	摂食・嚥下の看護		13:00~16:10	梁瀬 文子		可
	急変時の看護	8月23日(木)	9:00~12:10	峯田 雅寛		可
	急変時の看護		13:00~16:10			
[地域密着連携]	地域医療連携(1)	8月28日(火)	9:00~12:10	前田 邦彦・菅原 京子	可	
	地域医療連携(1)		13:00~16:10			
	連携のためのスキル	8月30日(木)	9:00~12:10	塩野 貴美		
	連携のためのスキル		13:00~16:10			
	連携のためのスキル	9月4日(火)	9:00~12:10	醍醐 孝典		
	連携のためのスキル		13:00~16:10			
	地域医療連携(2)	9月6日(木)	9:00~12:10	菅原 京子・佐藤 志保	可	
	地域医療連携(2)		13:00~16:10	高橋 俊章・慶徳 民夫		
	地域医療の実際	9月11日(火)	9:00~12:10	井上 京子・佐藤 志保	可	
	地域連携事例検討		13:00~16:10			
[看護研究の基礎]	看護研究の進め方	9月13日(木)	9:00~10:30	今野 浩之		
	看護研究の進め方		10:40~12:10	佐藤 志保		
	看護研究の進め方		13:00~16:10			
	量的研究	9月18日(火)	9:00~12:10	後藤 順子・今野 浩之	可	
	量的研究		13:00~16:10			
	質的・記述的研究	9月20日(木)	9:00~12:10	今野 浩之	可	
	質的・記述的研究		13:00~16:10			
	研究計画の作成と発表のルール	9月25日(火)	9:00~12:10	遠藤 恵子・後藤 順子		
	研究計画の作成と発表のルール		13:00~16:10	井上 京子・今野 浩之		
	研究計画の作成と発表のルール	9月27日(木)	9:00~12:10	後藤 順子・井上 京子		
研究計画の作成と発表のルール	13:00~16:10		今野 浩之			

\* 看護過程を選択する方は、7/31(火)午前と午後の両方を受講して下さい。

## H30年度ブラッシュアッププログラムMinute Paperの集計結果

単位 上段:人  
下段:%

【講義への参加度】 A:参加できた B:どちらかと言えばできた C:どちらかと言えばできない D:参加できなかった

	大学で受講					ICTで受講					計				
	A	B	C	D	他	A	B	C	D	他	A	B	C	D	他
看護の動向と傾向	9	3	1								9	3	1		
	69.2	23.1	7.7								69.2	23.1	7.7		
根拠に基づく看護	116	8				48	13	1	1		164	21	1	1	
	93.5	6.5				76.2	20.6	1.6	1.6		87.7	11.3	0.5	0.5	
地域密着連携	32					29	14	1			61	14	1		
	100.0					65.9	31.8	2.3			80.3	18.4	1.3		
看護研究の基礎	31	17	1			9	7	1			40	24	2		
	63.3	34.7	2.0			52.9	41.2	5.9			60.6	36.4	3.0		
計	188	28	2			86	34	3	1		274	62	5	1	
	86.2	12.9	0.9			69.4	27.4	2.4	0.8		80.1	18.1	1.5	0.3	

【内容の理解度】 4:理解できた 3:どちらかと言えばできた 2:どちらかと言えばできない 1:理解できなかった

	大学で受講					ICTで受講					計				
	A	B	C	D	他	A	B	C	D	他	A	B	C	D	他
看護の動向と傾向	8	3			2						8	3			2
	61.5	23.1			15.4						61.5	23.1			15.4
根拠に基づく看護	112	12				47	15	1			159	27	1		
	90.3	9.7				74.6	23.8	1.6			85.0	14.5	0.5		
地域密着連携	29	3				27	17				56	20			
	90.6	9.4				61.4	38.6				73.7	26.3			
看護研究の基礎	28	19	2			4	12	1			32	31	3		
	57.1	38.8	4.1			23.5	70.6	5.9			48.5	47.0	4.5		
計	177	37	2		2	78	44	2			255	81	4		2
	81.2	17.0	0.9		0.9	62.9	35.5	1.6			74.5	23.7	1.2		0.6

【講義の満足度】 4:満足できた 3:どちらかと言えばできた 2:どちらかと言えばできない 1:満足できなかった

	大学で受講					ICTで受講					計				
	A	B	C	D	他	A	B	C	D	他	A	B	C	D	他
看護の動向と傾向	7	6									7	6			
	53.8	46.2									53.8	46.2			
根拠に基づく看護	112	12				49	12	2			161	24	2		
	90.3	9.7				77.8	19.0	3.2			86.1	12.8	1.1		
地域密着連携	31	1				27	17				58	18			
	96.9	3.1				61.4	38.6				76.3	23.7			
看護研究の基礎	29	18	2			8	9				37	27	2		
	59.2	36.7	4.1			47.1	52.9				56.1	40.9	3.0		
計	179	37	2			84	38	2			263	75	4		
	82.1	17.0	0.9			67.8	30.6	1.6			76.9	21.9	1.2		

\* 各科目の受講者数は単元ごとの受講者の合計である。

「山形発・地元ナース養成プログラム」におけるリカレント教育効果—履修証明修了生の仕事観の変化—

○佐藤志保, 井上京子, 高橋直美, 今野浩之, 菅原京子, 槌谷由美子, 渡邊礼子  
齋藤愛依, 安保寛明, 沼澤さとみ, 後藤順子, 遠藤恵子, 前田邦彦

山形県立保健医療大学

【目的】本学では、平成26年度文部科学省補助金事業の課題解決型高度医療人材養成プログラムに採択された「山形発・地元ナース養成プログラム」の事業の一環として、リカレント教育に取り組んでいる。本研究は、リカレント教育の教育効果を検討するために、小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム（以下プログラム）履修証明修了生（以下修了生）の仕事観の変化に着目して教育効果を明らかにすることを目的とした。【方法】本研究は、平成27～28年度に120時間のプログラムを全て履修し、履修証明書が交付された修了生のうち3名を対象に、修了から約1年半後にフォーカス・グループ・インタビューを実施した。調査内容は、1) プログラムの受講により看護に対する考え方や実践にどのような変化があったか、2) プログラムでの学びを今後どのように活かしていきたいか、であった。得られた録音内容から逐語録を作成し、テーマに沿って抽出した内容を、意味内容の類似する項目に集約し分類した。複数の研究者で帰納的に分析を行い、妥当性を高めた。【倫理的配慮】研究者所属施設の倫理審査委員会の承認を得た。（承認番号1801-22）【結果】研究に参加した修了生は、30代後半～40代前半であった。カテゴリーを<>で示した。プログラム受講前の修了生は、<小規模病院に所属していることで感じる引け目>があり<目標がなく日常業務的な仕事のこなし方>をしていた。受講後は<小規模病院での看護実践に対する自信の獲得>があり、<自身の看護実践の深まり>とともに<仕事の充実感の高まりと働く意欲の再燃>へと変化したことが語られた。さらに、<新たな目標を見出し自ら行動する意欲の向上>、<研修による学びの再発見と職場での活用>と、個人の範囲から職場の範囲へ視野が拡大していった。これには、<同じ職場環境の看護師との交流により得られた自己肯定感>、<職場で寄せられる自分への期待と多職種との円滑な連携による充足感>の要因が影響していた。一方で、これまで気づくことのなかった<職場で感じる働く意欲の温度差と看護師の疲弊感>といった職場の現状に目が向けられ、今後の課題として語られた。【考察】本プログラムの履修により、修了生は同様な職場環境に勤務する看護師との交流を通して、知識を刷新するだけでなく、自分の価値を見つめなおし、小規模病院等で働く意義を再確認し、働く意欲につながった。プログラム修了後は修了生個人の内なる変化にとどまっていたが、時間の経過とともに、職場での自分への期待や、職場の課題の気づきによって、職場全体の働く意欲の向上に挑戦する姿勢へと変化していった。本事業のプログラムの教育効果として、修了生の仕事観の変化に対しても影響を及ぼしていると言える。今後は、仕事や学ぶ意欲が継続できるようにプログラムを強化する必要があると示唆された。

## 平成 30 年度 フォローアップ研修実施報告

研修生:平成 28・29 年度履修証明修了生のうち 7 名

## 1. 指導力スキルアップ研修 (6 月 6 日～7 月 18 日)

概要:「根拠に基づく看護」をテーマとした研修会の企画と実施・評価として、研修生の施設の新人及び3年目の看護師を対象に、フィジコを使用した研修「やってみよう!フィジカルアセスメント」を実施した。

○研修生の感想や意見など

- ・研修会を開くにあたり、自身の担当の領域について勉強したので、自分の学びにも繋がった。教えることは、自分も学ぶ機会になるので良い体験になった。
- ・準備した資料を読むことが多く、もっと現場の経験を話しながらできると良かった。人に伝えることは難しいと、つくづく感じた。
- ・準備をしっかり行い練習もして実践に臨んだが、一方的な研修になってしまったような気がした。
- ・様々な病院から集まってきたので、もっと情報交換を行う時間を取ればよかった。
- ・研修会を企画から実施まで行うことで、学ぶことが多くあった。メンバー全員で作上げた研修となり、とても有意義なものとなった。

## 2. 看護研究ステップアップ研修 (6 月 6 日～10 月 31 日)

概要:研究計画書を作成し、計画に基づき、研究を実施しまとめた。最終日に、各自それぞれがまとめたものを発表し、意見交換を行った。

○研修生の感想や意見など

- ・ブラッシュアッププログラムで作成した研究計画に引き続き取り組み、実際に進めることができた。
- ・時間がなくて大変だったが、なんとかやることができ、苦手意識がやわらいた。
- ・自分の知りたかったことについて、実際に研究に取り組むことができ、苦しさもあったが楽しさを感じることができた。
- ・実際に研究をやってみて、少し自信がついたような気がする。

## 3. 地元医療連携ステップアップ研修 (12 月 11 日)

概要:相互理解連携論の「連携をすすめる上で必要なスキル 1」の講義・演習に参加し、コミュニケーション・ファシリテーションについて学んだ。

○研修生の感想や意見など

- ・看護師としての職業を深く考える機会がなかったが、講義の中で学生さんの意見をたくさん聞き、自分の看護師としての職業観を深めることができた。
- ・今、現場に入って仕事をする中で、忘れがちになっている看護の原点をもう一度考え直す機会になった。
- ・患者や対象の思いを引き出す話の聞き方や、話の仕方を再学習できた。今後の実践に活かしていきたい。
- ・長年仕事を行っているとなれ合いや自己流などになっているところがあるので、初心に戻り、患者の視点に立った看護、医療の提供を行うことに留意したいと思った。
- ・コーチングの講義の時は、学生さんと“聴く”ワークができたことがとても良かった。
- ・患者さんの反応の変化を見逃さないように、普段からコミュニケーション技術を高める努力をして、観察力を伸ばしていきたい。

### 3. 人事交流

#### 1) 人事交流の実施

平成 30 年度は、12 の協力病院うち 7 病院と人事交流を実施した。

実施に際して、事前に人事交流に関する要綱を作成し、人事交流先との協定を取り交わした。

##### (1) 人事交流事業の目的

小規模病院等の看護師と本学看護学科の教員の人事交流を通して、お互いの業務の相互理解と教育力の向上を図る。

##### (2) 交流実績（日程・派遣先など）

【大学 ⇒ 病院】 1 名・公立高島病院へ 8 月 23 日～29 日（土日を除く 5 日間）

##### <研修内容>

日程		項目	内容
1 日目	午前	オリエンテーション	外来案内、フットケア外来の見学
	午後	一般病棟の見学	転棟引継ぎ、退院支援カンファレンス、神経内科医師による回診、病棟スタッフの研修報告
2 日目	午前	訪問看護ステーション	同行訪問 5 件
	午後		
3 日目	午前	地域包括ケア病棟	リハビリテーション見学、ST 食事摂取評価、退院調整カンファレンス
	午後		
4 日目	午前	医療保険適用型療養病棟	褥瘡・壊死創処置、ST による食事介助と栄養指導、多職種カンファレンス、ミストバス介助見学
	午後		
5 日目	午前	医療連携・相談室	MSW の役割、退院支援・退院調整の実際、相談業務
	午後	講演会	「地域包括ケアシステムと地域医療について」 高島町保健医療統括監 加藤修一先生

##### 【病院 ⇒ 大学】 7 病院から 10 名

日程	病院数	派遣病院
6 月 27 日	7	最上町立最上病院、川西湖山病院、公立高島病院、みゆき会病院、小国町立病院、尾花沢病院、寒河江市立病院
6 月 28 日	3	最上町立最上病院、小国町立病院、尾花沢病院
10 月 3 日～10 月 4 日	2	小国町立病院、尾花沢病院
10 月 10 日～10 月 11 日	2	川西湖山病院、尾花沢病院
10 月 24 日～10 月 25 日	1	最上町立最上病院
10 月 30 日	1	小国町立病院
10 月 30 日～10 月 31 日	2	公立高島病院、寒河江市立病院
11 月 1 日～11 月 2 日	2	小国町立病院、寒河江市立病院
11 月 7 日	4	公立高島病院、みゆき会病院、尾花沢病院、寒河江市立病院
11 月 8 日	1	小国町立病院
11 月 14 日～11 月 15 日	4	川西湖山病院、公立高島病院、小国町立病院、寒河江市立病院

<研修内容>

	日程	1限	2限	3限	4限	5限
1	6月27日		オリエンテーション	大学の施設見学・シミュレーター		
2	6月28日		ジェネラリズム看護論	文献検索	振り返り	
3	11月1日		看護人間関係論	文献検索	授業設計	
	11月2日		授業準備	看護教育学	看護教育学	振り返り
4	11月14日		教員の研究の取組	ジェネラリズム看護論		
	11月15日		終末期看護論 6	終末期看護論 7	終末期看護論 8	振り返り
5	10月3日～14日	成人慢性期看護学実習				
6	10月10日～11日	成人慢性期看護学実習				
7	10月24日～25日	成人慢性期看護学実習				
8	10月30日～31日	成人慢性期看護学実習				
9	11月7日		実習の位置付け・組み立て・受け入れ			
10	10月30日		授業設計	終末期看護論 1	終末期看護論 5	振り返り
	11月8日		文献検索	終末期看護論 2	終末期看護論 4	振り返り
	11月15日		終末期看護論 6	終末期看護論 7	終末期看護論 8	振り返り

\*塗りつぶしの日程は同じ日

\*昨年度の人事交流評価会議での意見を踏まえ、大学での研修受け入れ日程や内容を幾つかのパターンで構成し、可能な日程で研修に参加できるようにした。また、「教育力の向上」に視点を置いた研修として、授業設計、実習の位置づけ・組み立て・受け入れ、といった大学教育に関する内容を入れた。「業務の相互理解」として、教員の業務の1つである研究について、取り組んでいる研究の紹介を行った。



オリエンテーション



シミュレーター研修



ジェネラリズム看護論



振り返り



### (3) 人事交流者の主な感想・意見

#### 【大学 ⇒ 病院】

##### <研修成果・所見>

- ・地域密着、かつ地域完結型の病院という特徴のある病院で、看護師をはじめ病院の職員が一丸となり患者の健康を支える役割は、多面的で奥行きのあるものであると印象を受けた。
- ・多くの高齢者(住民)の体調の悪化が生活の流れの中に存在することを改めて認識し、生活への支援が治療と並列した重要な位置づけにあることを再確認できた。
- ・私たち看護師が、患者の生きてきた姿勢や病への思いを受け止めながらケアしていることを再確認できた。
- ・地域で暮らす患者や療養者とご家族の声を聴くことができよかった。山形に来て、研究の対象とする人たちの思いを直接聴ける機会がなかったが、今回の人事交流を通して、研究の計画に役立てることができる情報を得ることが出来た。

##### <研修に対する意見・要望等>

- ・職員の皆様が温かい雰囲気でご接してくださり、のびのびと学ぶことができた。

#### 【病院 ⇒ 大学】

##### <研修成果・所見>

- ・終末期の看護で、同じテーマについていろいろな分野で活躍している方から講義を受けることにより、広い視点で考えることができた。
- ・学生は自分の意見を発表したり、他の学生の意見を聞くことにより、より掘り下げて考えることができていた。
- ・大学教育では知識を得るだけの教育ではなく、計画性を持ち、自分で考え感じとる教育をしていると感じた。4年間を通しての計画性、自主性、好奇心、興味、疑問を持って学ぶことはとても大切なことで、スタッフ教育にも通じることと思った。
- ・大学の中に入るのは初めてで、新鮮な体験ができた。学生さんがしっかりした目標と意思をもって学んでいるのを感じた。
- ・実習を受ける側の病院の指導者が、学校の教員と連絡を密にして情報を共有して学生に関することの重要性や、学生からの質問の返答の方法も思考力を大事にして関ること、なぜその答えが出たのかを聞く、といったようなやり取りがとても重要であることがわかった。
- ・看護学実習研修に参加して指導する立場からの研修を受けたことで、私がいままで病院で行ってきた新人とスタッフの指導を考えて、新たに学ぶことが沢山あった。これからの指導に今回の研修を生かしていきたい。
- ・公立高島病院より実習受け入れの経験を聞き、大学が十分な準備をし、病院側との話し合いがされ、共に作っていくことなのだとして理解した。実際に演習シートに自施設で受け入れした場合のプログラムを作成してみたことで、自施設の現状役割について認識した。

##### <研修に対する意見・要望等>

- ・今回の施設外での活動を通し人脈が広がり、地元住民の多様な健康問題に、幅広く対応できる看護職育成に向けて、大学と小規模病院との協働について、今後も交流を深めさせていただきたい。

・学生さんの実習は看護の基本のところ。慣れてしまうと基本を忘れがちになる。学ぶことも沢山あった。初心にもどり、丁寧に患者に寄り添った看護をしていきたい。

#### (4) 総括及び今後の課題

今年度の【大学 ⇒ 病院】については、前年度と同様に5日間の日程で1名の教員が行った教員の研修テーマにあった施設で、施設だけでなく地域についても広く情報を得ることができた研修であった。今後の自身の研究活動に活かせる情報を得る機会となり、貴重な経験となっていたようであった。

今年度の【病院 ⇒ 大学】については、6月～11月の期間に6コース（各2日間）を設定し、病院側が複数のコースを選択して実施できるようにして人事交流を行った。参加施設は7病院で、各施設から1～2名参加した。その結果、概ね各コースには複数名の研修者がいた。オリエンテーションのみの日程を設け、人事交流の研修者が全員集まり、交流する時間をとった。

昨年度の研修アンケートで、「3日間の研修は長い」とあったが、オリエンテーションを事前に全員に行ったことで、各研修の回に参加する研修生が違ってもしっかりと行う必要がなく、その分内容の濃い2日間になった。このことについては昨年度の課題が解決されたと考える。

今年度は、研修内容の中に、実習や講義の組み立てについての講義・演習を入れた。実際に実習を受け入れた経験を聞き、自施設で実習を受け入れるとしたらどのようなことができるか、プログラムを作成する演習を行った。研修を通し実習の具体的な組み立てを理解することにより、自施設で実習を受け入れる際のイメージ作りに繋がったと考える。

今年度も複数の研修者が人事交流に参加されたことで、同じような規模の病院ならではの課題等について情報交換ができていた。

人事交流事業の目的の1つである「大学及び病院業務の概要の相互理解」については、教員の職務である「研究」について、小規模病院の看護職を対象とした研究に取り組んでいる教員と情報交換や意見交換ができたことにより、相互理解も深まったと考える。

## 2) 人事交流事業評価会議

実施した人事交流について、交流先の管理職（看護部長等）からの評価を頂き、今後の検討材料とすることを目的に人事交流評価会議を実施した。

- (1) 開催日時：平成30年12月17日（月）11時～12時30分 本学401会議室
- (2) 出席者：小国町立病院 佐藤看護部長、最上町立最上病院 有路総看護師長  
公立高島病院 竹田看護部長、高橋副看護部長  
川西湖山病院 金子看護部長代行、尾花沢病院 田中看護部長  
寒河江市立病院 森総看護師長

学内：前田学長、遠藤恵子教授、菅原教授、看護実践研究センター佐藤・富樫・設楽

### (3) 会議内容：

#### ①人事交流事業の実施結果についての報告

- ・大学の人事交流担当者からスケジュール、研修内容についての報告を資料に基づき行った。

## ②意見交換

・人事交流についての意見では、「大学の教員を受け入れることで、お互いの気付きがあり勉強になる」、「受け入れ準備自体が勉強となり有意義であった」、「小規模病院の看護師が大学で学ぶということは職員のモチベーションのアップに繋がっている」、「興味が自信につながり、自信が自主性の芽生えに繋がってきた」などの意見が出された。

・病院側の人事交流の実施に関し、「病院と訪問看護ステーションや老健施設などの組織が異なっているので、受け入れる際にどのようにしていけば良いかも課題である」、「どのクラスの看護師を派遣すればよいか分からなかった」、「学生の実習の受け入れをやっていないので、全職員に、学生が何を学びたいかを、まず分かってもらわなければならない」、「まずやってみると少しずつ分かっていくことがあったので、全ての課題を解決してから出なくとも良いのではと思う」、「病院を知ってもらう機会となっている」、「大学の各事業について病院での位置づけを明確にしていなかったもので、それをしていかなければと思っている」などの意見が出された。

・本プログラムの今後については、「今までどおりのやり方で良い」、「私も参加したいという職員が多く出てきているので事業を継続していただきたい」、「40代の職員を中心に参加させているが意欲を持って学んでいて、現場の看護師の底上げとなっているので、病院で受講料を出すことも検討したい」などの意見が出された。



人事交流評価会議の様子

文責 看護実践研究センター特任講師 佐藤志保

#### 4. 看護研究相談・支援

##### 1) 報告と実施 (2019.2月末現在)

(1) 看護研究・支援の個別指導について

- ①相談件数 29 件、延べ相談回数 88 回 (同一病院等での複数件数あり)
- ②相談・支援の方法は、面談 (看護実践研究センター・研究室または所属先)、FAX、電話及びメール
- ③相談者の所属施設

施設	診療所	病院				その他高齢者施設等
		20～49 床	50～99 床	100～149 床	150～230 床	
施設数	0 ヶ所	0 ヶ所	1 ヶ所	1 ヶ所	3 ヶ所	7 ヶ所

④主な相談内容

テーマの決定	13 件
研究計画書の作成	13 件
データ収集・分析	16 件
考察・まとめ	16 件
発表	27 件

⑤発表 (予定も含む。)

- ・学会発表 . . . . . 2 件
- ・院内発表 . . . . . 14 件
- ・老健地区発表 . . . . . 13 件

(2) 看護研究の講義等について

- ・病院からの依頼 . . . . . 7 回 (150 床～230 床 ; 7 回)
- ・老健からの依頼 . . . . . 1 回

\* 看護研究に係る講義等 (同一病院で複数回あり。)

##### 2) 看護研究に係る研修会の開催

J ナースカフェと同日開催で、「質的研究の分析について学ぼう！」を行った。参加者数は3名で、本学多目的教育教室にて行った。質的研究をおこなった論文を使用し、結果の表し方、分析、まとめ等について学んだ。

終了後のアンケートより、内容について概ね理解でき、難易度はあまり高くないようであった。今後の企画について、「看護研究の講義を続けて欲しい」との声があった。

##### 3) 小規模病院等看護職との共同研究

小規模病院看護職が発案した「地域包括ケア病棟における看護職の思い」について、インタビュー調査をまとめ日本看護科学学会で発表した。また、フォローアップ事業で、この研究の分析過程を踏まえた学びを展開した。

#### 4) 看護研究発表会

地元ナースフォーラムと同日開催で、5年間の事業期間に看護研究相談を受けた小規模病院の看護師が行った看護研究についての発表会を開催した。演題は口演8題、示説9題の発表があり、活発な質疑応答も見受けられた。

別紙参照…チラシ (別紙7)

平成30年度「山形発・地元ナース養成プログラム」看護研究発表会アンケート集計結果  
(別紙8)



看護研究発表会の様子



示説発表

#### 5) 今後の課題

(1) 対象者のニーズに応じた相談支援の継続と支援体制の整備

毎年一定数の新規の相談支援の申し込みがあるが、それに対応できるマンパワー・時間等の資源が乏しい。支援体制を整備し、出来る限りニーズに応じた支援の継続を検討する。

文責 看護学科教授 後藤順子  
看護実践研究センター特任講師 佐藤志保

山形発・地元ナース養成プログラム

地元ナースフォーラム同日開催

参加無料

## 看護研究発表会

10月27日（土）10：00～11：45（講堂）

平成30年度は「山形発・地元ナース養成プログラム」事業の最終年度となり、事業期間中に看護研究相談・支援に携わらせて頂いた看護研究の発表会を企画しました。小規模病院等における看護研究の成果を、県内の小規模病院等の看護職の方々にお伝えする機会にしたいと考えております。

## ○タイムスケジュール

10：00 開会

10：05 看護研究相談・支援の実績報告

10：15 座長：尾花沢病院 田中 富美子さん

- ・長岡医院 小嶋 和美さん

- 災害時・緊急時の活用を目指した透析バックの評価

- ・川西湖山病院 榎 やちえさん

- 当病院におけるスキンケアの実態と学習会の効果

- ・町立真室川病院 黒坂 真智子さん

- 身体拘束に対する看護師の意識改革

- 認知症ケア加算導入に向けての取り組みを通して

- ・山形県立河北病院 外岡 佑貴さん

- パンフレット・術前訪問による情報提供が患者へ与える影響

～ 休憩 ～

11：05 座長：山形県立河北病院 柳沼 明美さん

- ・尾花沢病院 小屋 聡美さん

- アルツハイマー型認知症患者へなじみの暮らしを試みて

- ～趣味と遊びを生活に取り入れたケア～

- ・公立高畠病院 佐藤 裕美子さん

- 看護師とリハビリでのベッドサイド FIM 評価による情報共有

- ・天童市民病院 小山田 智里さん

- 踵部おむつポリマークッションによる除圧効果と褥瘡発生

- ～ケアの見直しから褥瘡発生軽減を試みて～

- ・最上町立最上病院 菅 倫子さん

- 外来通院している自立した高齢者の服薬状況の実態

11：45 閉会

ポスター発表

11：45～12：15

場所：食堂

\*13：00～地元ナースフォーラムにもご参加ください。

## 平成 30 年「山形発・地元ナース養成プログラム」看護研究発表会 アンケート集計結果

## ◎ アンケート回答状況

参加者数	アンケート回収数	回収率
85 名	60 名	70.6%

## ◎ 各質問に対する回答結果

## Q1 今回の看護研究発表会について、何で知りましたか。(複数回答)

チラシ	ホームページ	知人の紹介	その他	無回答
39 名	7 名	5 名	20 名	0 名

\* その他：院内掲示、授業、上司の勧め、発表のため。記載なし等

## Q2 看護研究発表会について

良かった	まあまあ良かった	あまり良くなかった	良くなかった	無回答
37 名	20 名	1 名	1 名	1 名
61.6%	33.3%	1.7%	1.7%	1.7%

## Q3 発表の内容は、理解できたか。

理解できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった	無回答
29 名	30 名	0 名	0 名	1 名
48.3%	50.0%	0%	0%	1.7%

## Q4 本学の看護研究相談支援を受けたいか。

是非受けたい	まあまあ受けたい	あまり受けたくない	受けたくない	無回答
38 名	13 名	1 名	1 名	7 名
63.3%	21.6%	1.7%	1.7%	11.7%

## Q7 参加者の年代について

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
0 名	7 名	9 名	17 名	21 名	5 名	0 名	1 名
0%	11.7%	15.0%	28.3%	35.0%	8.3%	0%	1.7%

## Q8 参加者の所属等について

病院	診療所	高齢者施設	教育機関	行政機関	学生	その他	無回答
41 名	1 名	0 名	5 名	2 名	9 名	0 名	2 名
68.3%	1.7%	0%	8.2%	3.4%	15.0%	0%	3.4%

**Q5「看護研究発表会」へのご意見・ご感想について(自由記載) \* ( ) 数字は同様な意見の件数**

- ・同規模の病院であり、抱えている課題も似ているところがあるので参考になった。(5)
- ・他病院での取組を知ることができてよかった。臨床ナースの研究が聞けてよかった。(4)
- ・研究の成果を発表・共有する機会として、地元の病院の皆様が興味を持っている様子が良く伝わった。(3)
- ・常に感じているテーマが多く、敷居の低い発表会で興味深く聞かせていただきました。(2)
- ・臨床での疑問から研究でその関係を明らかにする取組を学ぶことができました。(2)
- ・今後当院でも研究相談支援を受けたいと考えている。
- ・成果を発表する機会があることで頑張れたと思います。
- ・方法など細かい資料があれば、もっと次に活かせる。
- ・十分に研究支援されている内容と思いにくい。演題変更時の画面転換の手際が悪い。

**Q6「看護研究相談・支援」へのご意見・ご要望について(自由記載) \* ( ) 数字は同様な意見の件数**

- ・指導する人の知識不足等もあるので活用したい。(4)
- ・中小病院では研究相談できる機会が少ないため、今後も続いて欲しい。(4)
- ・指導を受けたときに何が不足していたのかを知りたかった。
- ・研究する時間確保が困難(スタッフ不足)になりつつある。
- ・発表のデータが配布資料で確認できなかったため、発表後に改めて関係をデータから考えることができなと感じた。



## 5. ICT 活用

### ICT 活用の実施

#### a：学士課程教育における ICT 活用

総合看護学実習 I において看護学科 4 年生 7 名を対象とし、山形県内の小規模病院等の実習施設 4 施設にて ICT を活用し学生指導を実施した。ICT の活用にあたり、事前に実習指導者の許可を得た。使用頻度は 10 日間の実習中に各施設それぞれ 4～9 回使用した。学生の実習進捗状況やスケジュールの変更等の共有、実習における学びの共有、学生の体調面での確認や実習カンファレンス等で使用した。学生と教員の二者間で行ったほか、実習指導者も交えて三者間でのカンファレンスも行った。



ICT を活用した実習指導の様子

ICT の実習での活用について、昨年度までは、学生と教員の二者間でのやり取りにとどまっていたが、今年度は実習指導者も交えての 3 者間でのカンファレンスで利用することができた。また、実習施設二施設と大学の三地点でのカンファレンスも行い、活用の幅をさらに広げることができた。しかし、昨年度同様、電波状況によって接続状況が不安定な場面があり、ICT を安定して使用できるネットワーク環境の確保が課題である。

#### b：ブラッシュアッププログラムにおける ICT 活用

今年度の小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムにおける ICT 利用は、7 施設延べ 100 名の利用であった。小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム全 21 単元の内、ICT で受講可能な単元は 14 単元であり、すべての単元で ICT での受講の希望があった。1 つの単元で最多 6 施設と接続した。

今年度は、講師のプレゼンテーション資料が見やすいように、テレビチャット汎用ソフトの付属機能を利用することで見やすさを大幅に改善することができた。また、学内の接続環境を整備することにより、昨年度に比べて接続状況が安定していた。そのため、映像や音声についてもグループワーク中の切断はなかった。ICT の受講者からも、まるで大学で受講しているようだと、高評価を得た。しかし、複数の施設と接続する場合に接続まで時間を費やしたり、一部の単元では、音声がよく聞こえにくい、グループワークの発表や板書の文字が見えにくいなどの指摘があった。

ICT 利用者数は、昨年と比較して倍の人数であり、ICT 受講に対するニーズの高さがうかがえる。今後、より多くの施設から ICT を使用した受講に対するスムーズな接続やクリアな音声、映像等が課題である。



ICT 活用の講義やグループワークの様子

文責 看護学科講師 樋谷由美子

## 6. 事業普及

### 1) ホームページ更新、ホームページコンテンツの見直し、修正

平成30年度は、40回（2月末時点）のホームページ更新を行った。ホームページの更新は、出来るだけタイムリーな情報が掲載できるようにした。

更新内容としては、協力施設バナー等の追加・修正、各コンテンツの内容修正、時々の実業の実施結果の記事を掲載した。

### 2) Jナース通信発行

本事業の取り組みについて紙面にまとめた「Jナース通信」を年2回（10・2月）発行した。県内の小規模病院、高齢者施設等や本学看護学科学生の保護者に配布した。また、本事業のウェブページ内でも見る事ができるようにし、紙面とデータの両方から事業普及に努めた。



【第5号】



【第6号】

### 3) 本事業の紹介

本学の市民向け公開講座『考えよう！健康と福祉』において、学士課程教育「地元論」について紹介し事業普及に努めた。

『山形の“地元”を語る－“地元論”で語ってきたもの－』



### 4) ICTデモンストレーションの実施

本事業への認知の拡大や、参加施設の増加を目的とし、県内小規模病院45施設に実施案内を送付した。今年度は、4施設より申し込みを受け、各施設に訪問しICTデモを実施した。そのうち、2施設は本事業の協力施設であり、他2施設はこれまでブラッシュアッププログラムへの参加のない新規の施設であった。

#### ○成果

協力施設では、前年度よりもICTでの受講をさらにスムーズに進めることが出来た。協力施設以外では、本事業の紹介も含め、ICT活用の便利さや自施設にしながら学ぶことが出来る価値を理解してもらう機会となった。

文責 看護実践研究センター特任講師 佐藤志保  
看護実践研究センター企画主任 設楽幸江

## 7. 看護実践研究センター

### 1) 看護実践研究センター運営関係

看護実践研究センター運営委員会を下記日程で開催した。

#### ○ 平成 30 年度第 1 回運営会議

開催日時 : 平成 30 年 5 月 29 日 (水) 10:30 ~ 12:00

場 所 : 本学 2 階 202 会議室

出席者 : 菅原運営委員、伊藤運営委員、真壁運営委員、佐竹運営委員、遠藤運営委員  
後藤看護相談・支援部会長、井上リカレント教育部会長、槌谷 ICT 活用部会長、  
看護実践研究センター佐藤特任講師、富樫事業推進主査、設楽企画主任

議 事 : ①平成 29 年度活動結果について  
②平成 29 年度決算について  
③他大学センターの受講料の状況  
④その他

#### ○ 平成 30 年度第 2 回運営会議

開催日時 : 平成 30 年 8 月 21 日 (水) 13:00 ~ 14:30

場 所 : 本学 2 階 202 会議室

出席者 : 菅原運営委員、伊藤運営委員、真壁運営委員、佐竹運営委員、遠藤運営委員  
後藤看護相談・支援部会長、井上リカレント教育部会長、槌谷 ICT 活用部会長、  
看護実践研究センター佐藤特任講師、富樫事業推進主査、設楽企画主任

議 事 : ①受講料についての調査結果について  
・他大学センターの状況  
・協力病院等に対するアンケート結果  
②授業料収入の試算について  
③センター存続についての現状と今後の展開について

### 2) リカレント教育関係

#### (1) 小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム

- ・平成 30 年度小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムを平成 30 年 7 月 24 日 (火) から 9 月 27 日 (木) の間で 20 日間開講した。
- ・規程に則り、小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムの受講生を募集し、受講生名簿を作成した。プログラム終了後、履修証明プログラム修了生に対し履修証明証を発行した。単元履修生には、履修結果を送付した。
- ・履修者登録票、履修証明書、履修結果、成績の保管・管理を担当した。



## (2) フォローアップ研修

- ・平成 30 年度フォローアップ研修を 6 月から 12 月の間で 8 日間開講した。
- ・平成 28～29 年度小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムの履修証明修了生に対し、フォローアップ研修の研修生を募集した。7 名の応募があった。



## (3) J ナースカフェ

- ・J ナースカフェを平成 30 年 11 月 21 日（水）10：00～16：00 に、本学第 4 講義室と情報処理室において開催し、午前 3 名、午後 4 名が参加した。午前は看護研究に関する研修会、午後は大学教員の取り組んだ研究の報告があり、意見交換を行うことが出来、双方の相互理解の場になった。
- ・ブラッシュアッププログラム受講生、人事交流研修者を対象に、学習の機会、小規模病院等の看護職の交流・情報交換の場として企画・開催した。

## (4) 看護 UP TO DATE

- ・小規模病院等看護職を対象とした看護 UP TO DATE 研修会を、平成 30 年 11 月 18 日（日）10：00～15：30 に開催した。今回は、診療所に勤務する看護師を対象とした、クリニックナースのスキルアップ「診療所における糖尿病患者の療養支援～ライフステージ別に」を開催した。参加者は 9 名であった。講師は、日本糖尿病療養指導士の資格を持つ管理栄養士と看護師が担当した。



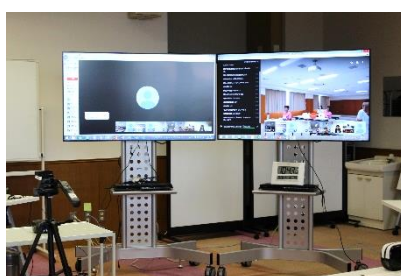
## 3) 看護研究相談・支援関係

- ・小規模病院等看護職より、看護研究相談や研究に関する研修会の支援の依頼があった際に、相談内容を聞き取りし、適任者への依頼・引継ぎ等を行った。今年度看護研究相談の依頼件数は 27 件、述べ相談回数は 88 件であった。看護研究支援の依頼件数は 8 件であった。（平成 31 年 2 月末現在）
- ・看護実践研究センターにおいて、センターのパソコンを使用し、医中誌、メディカルオンライン、CiNii 等の文献検索エンジンを使用した文献検索の方法や、文献の整理の仕方、エクセルの使い方について、看護研究の相談者に対し説明した。

#### 4) 情報発信関係

##### (1) 小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムでの ICT 活用

- ・プログラム開始前に、ICT のデモンストレーションの実施を小規模病院に案内し、申し込みのあった小規模病院に赴き行った。(申し込み施設数は 4 病院。そのうち、新規の病院は 2 病院で、協力病院は 2 病院であった。)
- ・ICT を利用する際の使用説明書を作成し、受講生に配布した。
- ・ブラッシュアッププログラムの開催中に、各受講者と接続、画面の切り替え、音響・カメラワーク等を実施した。
- ・ブラッシュアッププログラムの開催中に、ネットワークの接続トラブルや音声・画像の乱れ等のトラブルが発生した際随時対処した。



##### (2) 総合看護学実習での活用

- ・総合看護学実習において、iPad を学生に貸与し、実習先病院にいる学生と大学にいる担当教員を繋ぎ、実習状況の確認を行った。協力病院における実習では、事業で貸与している PC を用い実習状況の確認を行った。



文責 事業推進責任者 菅原京子 (看護学科教授)  
看護実践研究センター特任講師 佐藤志保

## 8 事業推進・評価

### 1) 地元ナースフォーラムの開催

今年度は本事業の最終年度となるので、これまでの成果の報告や大学と小規模病院との協働の重要性についての理解を図ることを目的に、「地元ナースフォーラム」を平成30年10月27日(土)に開催した。開催テーマを「大学と小規模病院等の協働による『地元ナース』の養成」とし、県内の医療施設や福祉施設のほか、看護系大学にも案内を送付した。

当日は、県内外の看護系大学関係者、医療施設関係者のほか、大学生や高校生など、合わせて170名の参加が得られた。参加者に行ったアンケートでは、「山形発・地元ナース養成事業の内容に興味を持てた」が86.6%、「大学と小規模病院等の取り組みに興味を持てた」が87.5%と、本事業の取り組みに多くの方が興味を持ってきていることが伺えた。

#### [地元ナースフォーラムの概要]

学長挨拶の後、県の玉木健康福祉部長の挨拶があり、その後菅原事業推進責任者から「山形発・地元ナース養成プログラムの成果」が報告された。

##### [菅原事業推進責任者]

- ・ 事業全体の成果としては、学生と教員の地元医療福祉への関心が深まり、学生が地元ナースとして就業する基盤ができてきたこと。
- ・ 小規模病院等の看護師にとって、自分たちの看護の価値を再認識し看護実践への自信獲得に繋がっている。又、人的ネットワークも構築されてきた。
- ・ 大学と小規模病院等が共に育ち好循環が生まれている。

次に、文部科学省医学教育課宇野専門官さまから、本事業に対する期待と題し、本事業を取り巻く環境(少子高齢化、医療需要、地域医療構想、病床機能の分化、モデル・コア・カリキュラム等)を踏まえて、本事業に対する期待を話された。

##### [宇野専門官]

- ・ 本事業は小規模病院のスタッフを養成していることが特徴的なことで、事業の内容は看護学教育のモデル・コア・カリキュラムにおいて看護人材に求められている基本的資質・能力に対応する面があり、山形県と同じような状況におかれている地域に波及することを通して、求められる看護人材が養成されていくのではないかと期待している。
- ・ 補助金が終了後も、補助事業の性格を踏まえて事業を継続することを期待している。



次に、「大学と小規模病院等との連携による地元ナースの養成」をテーマにシンポジウムを行った。まず、本事業の各事業に参加した4名が事例報告を行い、その後、高橋山形県町村会会長(最上町長)から「地元ナースを目指す若者への期待」、川本日本看護協会常務理事から「小規模病院等看護職の継続教育について」と題した講演をいただき、その後フロアを交えた意見交換が行われた。

##### [事例報告]

- ・ 五十嵐(本学4年生):総合看護学実習Ⅰ地元医療福祉コースでの経験と学びについて
- ・ 須貝(本学卒業生):地元ナースを目指した理由と現在の看護活動について
- ・ 三須(小国町立病院看護師):ブラッシュアッププログラムに参加して
- ・ 齋藤(本学助教):人事交流事業に参加して

##### [高橋山形県町村会会長(最上町長)]

- ・ 最上町の町づくりの基本的な考え方は、“いかにして魅力を発信し、人を呼び込むか”、“若者たちが自信を持って残れる環境づくり”、“みんなでどう支えあうか”である。
- ・ 魅力を発信して将来の移住、定住にまで繋げようというのが基本的な考えであるが、それを段階的に進めている(ふるさと納税の絆作り、お試し体験、二地域居住等)。
- ・ 最上町の地方創生の戦略ビジョンは、“子育て大国を目指そう”、“生涯現役でがんばれる健康と福祉の町づくり”、“農観商工連携・産業雇用の創出”、“環境にやさしい町づくりをしよう”である。



- 今日のテーマである健康と福祉の町づくりについてだが、これには前任の中村町長を抜きにしては語るができない。中村町長は8期32年間に亘り、健康と福祉の町づくりに尽力され、病院を中心に健康センター、特別老人ホームなどを含むウエルネスプラザを整備されてきた。
- 現在の町の保健税の収納率は98.03%、町民税の収納率は100%であり、これは町づくりに対する町民の信頼の賜物であり、最上町の健康と福祉の町づくりは、町づくりの主役である町民が担っていると言える。
- 最上町のウエルネスタウン構想には三つの理念があり、第一点は体の健康、次は心の健康、そして社会全体の健康であり、これはまさしく町づくりである。
- 現在、病院が建てられてから25年が経過したことから、原点に立ち返って点検しようとうエルネスタウン改革と言う事で進めているが、一番大切なことは、ウエルネスエリアで働いている人々の人材育成である。現役で働いている一人ひとりが生き生きと輝いていることが、人と人、地域と地域が支えあう社会に繋がっていくことに不可欠である。
- その中での課題の一つは、病院から退院といった場合に全ての家庭がそれに対応できる訳でないということであり、それには皆で支えあう居住空間の確保が必要であること、もう一つは医療・介護難民問題であり、それには町全体の交通体系の一元化ということが必要であることである。
- このようなことを考えると、人と人、地域と地域をどう繋げるかと言ったときに、大事なことは人材育成である。そのようなことから、山形県立保健医療大学、そしてこの事業の役割は極めて大きいと感銘している。
- 地方への移住・定住と言った場合、研修地の充実が定着率の最も影響を与えているというデータがでており、最上町も日本福祉大学、大正大学と連携し町を研修地として提供している。県立保健医療大学も本町を学びの場として絆作りに参加してくれることを是非お願いしたい。

[川本日本看護協会常務理事]

- これまで色々な職業について行われた研究で、専門職は9つの特性を満たしておかなければならないとされている。看護は専門職であり、私たちが専門職として存在するためにやらなければならないことがある。その中で私が大事にしていきたいと思っていることは、長期の教育を受けて独自の専門知識と技法を身に付けることである。
- 看護を取り巻く状況を見ると、看護職員の就業場所も変わってきており、今までの知識・技能を發揮する場が病院だけでなく、いろいろな場に広がりつつある。又、看護職に求められる役割も、ベッドサイドでじっくり関わるから、高度で集中的な医療ケアを担うチーム医療の中で看護の専門性を發揮するようになってきた。
- このようなことから、看護職にとって自分になりたい看護師像がなかなか見えづらい時代になってきた。このような背景をベースにしながらか人材育成をどうしていくかについては絶えず考えていかなければならない課題であると考えている。
- 社会の状況としては、超高齢化社会が進んでおり、超高齢化社会における社会保障制度の立て直しとして地域包括ケアシステムが構築されてきている。そのような中での看護職の立ち位置についても考えなければならない。
- 地域包括ケアシステムは市町村単位、医療供給体制は都道府県単位を中心に行われているが、この二つの仕組みが肩寄せ合いながらやっていると言う仕組みを理解し、そのような提供体制のシステムの中で、看護職として必要とされる能力は何かと言うことを考えながら人材育成をしていかなければならない。
- 人材育成の柱としては、看護の役割は24時間365日皆様を支え、最も身近にいる医療専門職として、患者の状態の変化を即座に察知しタイムリーにケアを提供していくことと考えているので、その人らしく生活できるようにその人の力を引き出しながらか、医療と生活の両方の視点を持ってチームケアのキーパーソンとしての力、医療と介護等のサービスを繋ぐ力、看取りに対応できる力を持つことと考えている。
- 実は私も大学教員として大学教育に関わってきたが、大事だと思っているポイントは、教育と現場がきちんと連続していなければならないということ、実践能力、自分の立ち位置を見据えて専門職として自律して判断していく力を養っていくことである。つまり、育成の連続性、看護実践能力の育成、自律性の育成、三点が重要である。



- ・ 看護職は専門職としてケアを受けられる方に最適な医療看護を提供するようにしなければならないので、継続教育で必要なことは、能力開発をしていかなければならない、ということである。
- ・ 継続教育は常に最善のケアを提供するために必要な知識・技術・態度の向上を促すものである。
- ・ 継続教育で最初に始まるのは新人看護職員研修だが、この新人看護職員研修がこれから看護職としてやっていく方にとっては大事な研修である。採用されて新人看護研修にパッと切り替えることは難しいと思われるので、大学においては実習に関して組織的な対応をとっていくことが大事だと思っている。
- ・ 組織における人材育成において大事なポイントは、数年後になりたい自分をイメージしながら、目標を掲げていくということであり、何のために研修するのか、何のために人材育成をするのかを考えながら、特に、個人のニーズ、社会のニーズ、組織のニーズを考えながらやっていただきたい。
- ・ それから、忘れて欲しくないことは、学習対象者はもう大人なんだということ、つまり、動機付けが大切だということである。
- ・ 学習の仕方では一番大事なことは、実際にやってみることで、やはり On the job-training の効果は大きいと思う。それから人に教えることが効果があるので、先輩と教育を受ける側がペアを組んで行う研修を On the job-training に取り入れていただくといいと思う。又、シャドウイングが一番効果がある。
- ・ 看護協会では、実践能力が大事だということ、ニーズをとらえる力、ケアする力、協働する力、意思決定を支える力の四つの力を核とする JNA ラダーを作っているが、これを本人は自己研鑽の目安として、教育する側は支援する側のツールとして使って欲しい。

〔意見交換〕

- ・ 大学との繋がりを大切にしながら体系的に学べるこの事業を活用させていただいて、人材育成に努めて行きたい。
- ・ 地元ナース養成プログラムの実施によって、学生の地元への就職は進んだのか。
- ・ 地元論の講義などは地元が目向いていない学生にとっても何かのきっかけに繋がっていると思う。
- ・ 地元ナース養成プログラムを始めてから、学生の中小規模の病院に対する関心が高くなってきていると実感している。
- ・ 地元ナース養成プログラム事業が順調に進められていることは素晴らしいことであり、補助金終了後も今後の展開を期待したい。
- ・ この事業は学生、小規模病院の看護職の方々そして教員との協働で作上げてきたと実感している。今後も協働を進め、質の高い看護を提供できる看護職を養成していきたい。



〔閉会〕

## 2) 第4回事業報告会

本事業の協力施設を対象に、平成30年度に実施した事業について報告会を実施した。協力施設から看護管理者、リカレント教育や人事交流事業に参加した看護職の方々に参加いただき、今年度の事業報告、今後の事業展開について意見交換を行った。

開催日時 : 平成30年12月17日(月)13時30分～15時

場所 : 本学4階 401会議室

出席者 : 最上町立最上病院 2名、公立高島病院 4名、川西湖山病院 3名  
尾花沢病院 2名、順仁堂遊佐病院 2名、町立真室川病院 1名、



矢吹病院 2名、寒河江市立病院 3名、町立金山診療所 1名、  
はとみね荘 1名、山形県立こころの医療センター 1名、みゆき会病院 2名  
本学教職員 10名

#### 【主な意見】

- ・ B Pに関しては学生時代に習っていることと違うこともあり、大変勉強となった。又、他のスタッフにも伝えることができた。フォローアップ研修では、他の病院で研修を実施したが、自施設とは違ったところで実施したことが良かった。なお、研究については、一人ひとりでの研究だったので大変で、二人でひとつのテーマをと言う事でも良かったのではないと思う。
- ・ ICTで受講したので病院内でB Pが受講できてよかった。知っていたようで知らなかったことがあった。ICTで若干音が聞こえなかったことがあった。研究は病院内ではなかなかできなかったが、院内で研究チームができるきっかけとなった。
- ・ ICTは働きながら学べるので大変良い。又、ワークライフバランスの中で学べる。
- ・ 他の病院の看護職の方との意見交換ができ、良かった。
- ・ ジェネラリスト看護論で話をさせていただいたが、学生は地元の小規模病院の病院を知る機会がないので、学生に小規模病院について知ってもらおう大変良い機会になった。学生は真剣に質問等を出していたので、知ってもらおういい機会となった。
- ・ 各事業を当院の教育の中に位置づけをしないといけないと感じている。
- ・ 看護研究を指導していただいたが、地元ナースフォーラムで発表もできて、研究のモチベーションに繋がっている。このことは他のスタッフにも波及している。
- ・ 人事交流に参加し大学での教え方を見聞きし、自分が新人に指導する際の参考になった。
- ・ 授業に参加して話をしたが、学生との意見交換の時間が少なかった。学生と一緒にもっと意見交換ができればと思った。
- ・ この事業で協力病院になっていることが、新採募集において、働きながら大学で学ぶことができる、大学と連携していると言うことが説明できるので、就職にも影響がある。波及効果があり、この事業に手ごたえを感じている。



事業報告会の様子

### 3) 協力施設の募集

本プログラムを展開していくためには、地域の小規模病院や高齢者施設等の協力が欠かせないことから、本学は小規模病院等と「連携に関する協定」を締結し、本プログラムの各事業に協力して頂く「協力施設」を募集している。

協力施設との連携事項は、以下のとおりである。

- ① 看護実践の向上に関する事
- ② 教育及び研究に関する事
- ③ 人材養成及び人事交流に関する事
- ④ 「山形発・地元ナース養成プログラム」の広報に関する事

昨年度までは、8つの小規模病院と1つの高齢者施設とで協定を締結していたが、今年度新たに村山地域の3病院と最上地域の1診療所と「連携に関する協定」を締結した。この結果、協力施設は下表のとおり、13施設となった。

病院等名	所在地	病床数	主な診療科
公立高島病院	〒992-0351 高島町大字高島 386	130	内・外・整形・産婦・小
最上町立最上病院	〒999-6101 最上町向町 64-3	70	内・外・整形・産婦・眼
医療法人社団緑愛会 川西湖山病院	〒999-0145 川西町大字下奥田 3796-20	109	内・整形
小国町立病院	〒999-8301 小国町あけぼの一丁目 1	55	内・小・外・整形・産婦
特別老人ホームはとみね荘	〒992-0351 高島町大字高島 303		
医療法人社団順仁堂 遊佐病院	〒999-8301 遊佐町遊佐字石田 7	84	内・外・小・婦・リハ
町立真室川病院	〒999-5312 真室川町大字新町 469-1	55	内・整形・耳鼻
医療法人敬愛会 尾花沢病院	〒999-0019 尾花沢市大字臈気 695-3	152	内・消・精内・リハ
山形県立 こころの医療センター	〒997-0019 鶴岡市茅原字草見鶴 51-1	213	精・心内・児童思春期精
社会医療法人みゆき会 みゆき会病院	〒999-3161 上山市弁天二丁目 8-11	183	内・整形・小歯・放
寒河江市立病院	〒991-0041 寒河江市大字寒河江字塩水 80	125	内・整形・外眼・皮
町立金山診療所	〒999-5402 最上郡金山町金山 548-2	19	内・外・小
医療法人社団清永会 矢吹病院	〒990-0885 山形市嶋北四丁目 5-5	40	内・外・腎臓内科・消・リハ

#### 4) 平成 30 年度外部評価委員会

外部の方から本事業に対する客観的な評価を頂くため本委員会を開催した。今年度は事業の最終年度となるため、当該年度の表意かに加え、5年間の事業全体についても意見を頂いた。

開催日時 : 平成 31 年 3 月 14 日 (木) 10:30~12:00

場 所 : 本学 2 階 201 会議室

出席者 : 外部評価委員 5 名

(3 名欠席、うち 1 名は代理出席)

<外部評価委員の内訳>

県看護担当課長、診療所長、看護協会理事、民生委員、小規模病院看護師、保健師、町内役員

議 事 : ① 今年度のプログラムの実施状況評価

② 5年間のまとめ

評価結果 : 別紙のとおり (別紙 9)

<主な意見>

- ・ 地域医療構想が進み、それぞれの病院の役割が変化していく中で、この事業の役割は大きいと思う。
- ・ 小規模病院の看護師にとっては、リカレント教育や看護研究の支援があることは、子育てしながらあきらめることなくキャリアアップできることに繋がり、大変ありがたい取り組みである。
- ・ 学生が学生のときから、この取り組みを体験し、卒業後も大学の支援を受けられるということ意識しながら地元で働けることが良い循環になっていけばと感じた。



5) 平成 30 年度 事業推進委員会

	開催日時・場所	議題・協議事項 (出席者数)
第 1 回	平成 30 年 4 月 17 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 議題 (1) 平成 30 年度事業推進体制について【協議】 (2) 平成 30 年度事業計画について (3) 平成 30 年度予算について (4) 協力病院等一覧について (5) リカレント教育検討課題について【協議】 (6) 平成 30 年度小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム案について【協議】 (7) 平成 30 年度フォローアップ研修案について【協議】 (8) 平成 30 年度人事交流事業案について【協議】 (9) 三重県立看護大学地域交流センター、滋賀県立大学地域交流看護実践研究センターの視察について (10) 第 4 回 J ナースカフェについて (11) 平成 30 年度看護研究相談支援の申し込み状況について (12) ICT レポートについて 3 その他 4 閉会 (出席者数 18 名)
第 2 回	平成 30 年 5 月 22 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 協議事項 (1) リカレント教育検討課題について 3 報告事項 (1) 人事交流事業について(修正版) (2) 外部評価委員の変更について (3) 協力病院の追加について (4) 平成 30 年度フォローアップ研修参加者について (5) ICT デモの実施について (6) ICT レポートについて 4 その他 5 閉会 (出席者数 19 名)
第 3 回	平成 30 年 6 月 19 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 協議事項 (1) ホームページ掲載の《実績報告》原稿について 3 報告事項 (1) 協力病院の追加について (2) 平成 30 年度人事交流事業研修者について (3) 平成 30 年度 ICT デモの実施について (4) ICT レポートについて 4 その他 5 閉会 (出席者数 18 名)

第 4 回	平成 30 年 7 月 17 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 議題 (1) 平成 30 年度小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム受講生の概要について (2) 平成 30 年度小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム開講式次第について (3) 協力病院の追加について (4) 公立大学の県内就職の状況について (5) 協力病院へのアンケートについて (6) ICT レポートについて 3 その他 4 閉会 (出席者数 15 名)
第 5 回	平成 30 年 9 月 18 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 協議事項 (1) 前期までの自己評価について (2) 地元ナースフォーラムについて (3) 小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム閉講式について 3 報告事項 (1) 人事交流について (2) 看護 UP TO DATE 研修会について (3) ICT レポートについて 4 その他 5 閉会 (出席者数 12 名)
第 6 回	平成 30 年 10 月 16 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 協議事項 (1) 前期までの事業評価について (2) 地元ナースフォーラムについて 3 報告事項 (1) 平成 30 年度ブラッシュアッププログラム実施結果について (2) 第 5 回 J ナースカフェについて (3) ICT レポートについて 4 その他 5 閉会 (出席者数 15 名)
第 7 回	平成 30 年 11 月 20 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 協議事項 (1) 人事交流評価会議及び第 4 回事業報告会日程案について 3 報告事項 (1) 地元ナースフォーラムの結果について (2) 看護研究発表会の結果について (3) 看護 UP TO DATE 研修会の結果について (4) ICT レポートについて 4 その他 5 閉会 (出席者数 14 名)

第 8 回	平成 30 年 12 月 18 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 協議事項 (1) 今後のスケジュールについて 3 報告事項 (1) 平成 30 年度人事交流について (2) 平成 30 年度フォローアップ研修について (3) 人事交流評価会議の概要について (4) 事業報告会の概要について (5) 第 5 回 J ナースカフェについて (6) ICT レポートについて 4 その他 5 閉会  (出席者数 15 名)
第 9 回	平成 31 年 1 月 22 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 協議事項 (1) 山形発・地元ナース養成プログラムの今後について (2) 平成 30 年度活動報告書の作成について 3 報告事項 (1) ICT レポートについて 4 その他 5 閉会  (出席者数 17 名)
第 10 回	平成 31 年 2 月 19 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 協議事項 (1) 平成 30 年度事業評価について (2) 活動報告書 (5 年間のまとめ) について 3 報告事項 (1) ICT レポートについて 4 その他 (1) 履修証明プログラム制度の改正等について 5 閉会  (出席者数 17 名)
第 11 回	平成 31 年 3 月 19 日 (火) 9 時 00 分～10 時 00 分 (本学 4 階 401 会議室)	1 開会 2 協議事項 (1) 5 年間のまとめについて (2) 地元ナース養成プログラムおよび看護実践研究センターの再構築について 3 報告事項 (1) 外部評価委員会の概要について (2) ICT レポートについて 4 その他 5 閉会  (出席者数 16 名)

## 「山形発・地元ナース養成プログラム」事業評価表

(S : 計画を上回って実施している    A : 計画を十分に実施している    B : 計画を十分には実施していない    C : 計画を実施していない)

## 【学士課程教育】

計 画	実施状況	成果と今後の課題	評 価	
			自己	委員
<p>①4月 「地元論」、「相互理解連携論」、「ジェネラリズム看護論」開講 (新教育課程完成年度)</p>	<p>「地元論」に59人、「相互理解連携論」に60人、「ジェネラリズム看護論」に12人の学生が履修した。計画通り講義を実施した。</p>	<p>【新設科目の開講】 成果：毎回の講義終了後の学生の感想から、各科目が設定している到達目標を達成したことが伺えた。 今後の取組方針：各科目の内容を随時点検し、他科目との重複や不足などについて、他科目と調整し、さらに精練した教育内容とする。</p>		
<p>②6月 リカレント教育修了生がいる小規模病院等で総合看護実習を開始する。又、修了生がいない小規模病院等でも地元医療福祉を強化した実習を実施する。</p>	<p>6月から「総合看護学実習Ⅰ」の地元医療福祉コース(地元ナース)を開始した。 リカレント教育修了生がいる3つの病院で5人、修了生がいない小規模病院で4人の学生が実習を行った。実習終了後に大学で実習報告会を開催し、学生の学びや実習指導について共有した。  当初の計画にはなかったが、3年生が履修する成人慢性期看護学実習で、新規にリカレント教育修了生がいる小規模病院で6人が実習した。</p>	<p>【地元医療福祉を強化した実習】 成果：総合看護学実習Ⅰで、リカレント教育修了生がいる3施設で実習を行った。学生は小規模病院での実習を通して、地域に暮らす人々の営みを支える看護、健康問題を解決するために必要な地域の社会資源の活用、今後の課題の解決方法を習得できた。 計画にはなかったが、3年生の成人慢性期看護学実習をリカレント教育修了生がいる小規模病院で実施し、学生は実習目標を達成することが出来た。 なお、上記3施設はリカレント教育修了生が5人、6人、8人とおり、又、その修了生の一部の方々は大学との人事交流にも参加している。このようなことから、大学の教育内容や学生の状況を理解し、実習の企画調整をはじめ、学生が到達目標を達成するための効果的な役割を果たしてくれたと考える。</p>	<p>A (② は S)</p>	<p>A (② は S)</p>

<p>③10月 新設3科目等の教育成果について評価を実施し、評価を踏まえて平成31年度以降の検討を行う。</p>	<p>全学年を対象に、1月から2月に教育評価を調査した。1年生は63人に配布し57人から回収、2年生は60人に配布し43人から回収、3年生は64人に配布し44人から回収、4年生は65人に配布し59人から回収した。</p>	<p>実習報告会により担当教員だけでなく広く学内の成果を発信するとともに、実習指導者に対して成果をフィードバックすることができた。  課題：大学から遠方の実習施設のため、学生の宿泊所の確保が課題である。  課題への取組方針：実習施設と協議し、実習内容だけでなく、学生が実習を就学できる環境の整備を検討する。</p> <p>【31年度以降の検討】  成果：新設3科目と小規模病院で行う実習で目標とするすべての項目で到達度は高く、学生は小規模病院の看護が果たす役割、地域における健康課題に高い関心を持つことができた。評価が高い項目とそうでない項目があるので、今後の教育内容の具体的な検討をする資料となった。  「すべての学生が卒業時点で地元で就業する価値を理解できる」の目標に対して、卒業を迎える4年生は、とても理解できた41人(69.5%)、少し理解できた16人(27.1%)、あまり理解できなかった2人(3.4%)、まったく理解できなかった0人であった。概ね卒業時の目標は達成できた。  今後の取組方針：毎年、同様の調査を全学年の学生を対象に実施し、教育評価を経時的に分析し、教育内容に活かす。</p>	
--	--	---	--

【リカレント教育】

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	評 価	
			自己	委員
<p>④8月 小規模病院等の看護職を対象とした「小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム」を開講する（～9月）</p> <p>○5月 ブラッシュアッププログラム受講生にフォローアップ研修案内送付</p> <p>⑤6月 前年度に「小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム」を修了した者を対象とした「フォローアップ研修」を実施する。（～11月）</p>	<p>受講生は52名であった（53名から申し込みがあったが、1名より勤務の都合がつかず、直前でキャンセルの連絡があった。）。内訳は全科目受講予定者が8名（本年度だけでの受講予定が5名、昨年度と本年度での受講が3名）であった。予定者8名全員が、全科目を受講した。</p> <p>－昨年度・昨年度のブラッシュアッププログラムで履修証明書を交付した12名に対し、フォローアップ研修の案内を送付した。</p> <p>対象者12名中、7名からフォローアップ研修の申し込みがあった。 前期は指導カスキルアップ研修と看護研究ステップアップ研修、後期は看護研究ステップアップ研修と地元医療連携ステップアップ研修を行った。 指導カスキルアップ研修では、ブラッシュアッププログラムをフォローする研修として、研修生が新卒と3年目の看護職員を対象とした「研修」を企画した。研修会場を川西湖山病院とし、公立高島病院、川西湖山病院の対象となる看護職8名が、当研修に参加した。 看護研究ステップアップでは、前期は昨年度のブラッシュアッププログラムで作成した看護研究計画書のテーマについて継続して取り組み、後期</p>	<p>【ブラッシュアッププログラム】 成果；昨年度より新規の病院や受講者の総数が多く、特に単元履修とICT利用での受講が多くあった。 課題；履修証明プログラム制度が、今後改正（履修時間数の規定が120時間から60時間に半減）になる予定と聞いているので、来年度以降の開講に当たっては、内容の見直しが必要となる。 課題への取組方針；履修証明プログラム制度の改正の状況を踏まえ、受講生のニーズに合った内容に再構築する。</p> <p>【フォローアップ研修】 成果；指導カスキルアップ研修では、受講生が実際に研修会を企画し運営した。受講者からは、今後の実践に活かせる内容で有意義な研修であったとの感想があった。 看護ステップアップ研修では、参加者全員が研究に取り組み、実施結果の発表ができた。実際に研究に取り組み、研究の進め方や分析について学び、苦手意識が薄らいだとの感想があった。 地元医療連携ステップアップ研修では、学部学生と共に演習に熱心に取り組み、シネメデュケーションという新たな演習では、看護職とは何かを改めて考える機会になっていた。学んだスキルを現場での実践に活かして行きたいという感想があった。</p>	A	A



<p>⑥1月 30年度受講生追跡調査を実施する。</p> <p>○3月 ブラッシュアッププログラム案内送付</p> <p>⑦6月 対象者や課題を絞って小規模病院等の看護師が参加しやすいような日程で「看護 up to date 研修」を実施する。</p>	<p>は各自が調査を実施し結果をまとめ発表した。        地元医療連携ステップアップ研修では、学部の2年生の相互理解連携論の「連携を進める上で必要なスキル1」に参加し、医療コミュニケーション、ファシリテーション、シネメデューケーションを通し、連携のためのスキルを学び、看護師としてのプロフェッショナルについて考えを深めた。</p> <p>平成30年度ブラッシュアッププログラムの受講生に対し、受講3ヵ月後の調査を実施した。現在、データの集計と分析を行っている。</p> <p>平成30年11月18日(日)に、県内の診療所の看護師を対象に開催した。内容は以前実施したニーズ調査で受講したい内容の上位に挙げられていた「糖尿病患者の療育支援について」とした。テーマは「診療所における糖尿病患者への療養支援～ライフステージ別に」とし、日本糖尿病療養指導士の看護師と栄養士を講師に開催した。参加者は9名であった。</p>	<p>課題：実施期間が5ヶ月間で長期であるものの、来学は概ね2週間毎の8回となるため、日々の業務により、意欲の維持が困難な様子が見られる場合もあった。</p> <p>課題への取組方針：研究の実施については、メールでの相談を受け、学期の合間に進捗を伺う連絡をいれ、刺激付けをした。</p> <p>【受講生追跡調査】        現在、データを集計し分析中である。</p> <p>【看護 up to date 研修】        成果：参加人数が少なかったが、和気藹々と各人から質問や意見が出され、希望する情報が得られた研修会となっていたようであった。研修会後のアンケート結果から、糖尿病をテーマとした研修会を今後も行って欲しいと言う要望が複数名からあり、診療所の現状にあった研修会になったと考えられる。</p> <p>課題：広報する期間が短く、研修会の情報があまり広がらなかった。</p> <p>課題への取組方針：年度当初に実施計画を公開し、詳細が確定したら迅速に案内を送付する。</p>	
--	--	---	--

【人事交流】

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	評 価	
			自己	委員
<p>⑧8月 大学教員と小規模病院等の看護職との人事交流を行う。 (～11月)</p>	<p>今年度人事交流を実施する7病院(「大学から病院へ」が1病院、「病院から大学へ」が7病院)とそれぞれ「職員研修に係る覚書」を取り交わした。 大学から病院へは5日間の日程で、8月に公立高島病院に教員1名を派遣した。 病院から大学へは7病院から10名の看護職が来学し人事交流を実施した。6月に人事交流参加者に対し顔合わせも兼ね、全体でオリエンテーションを行い、その後、各参加者がそれぞれの日程で参加することとした。日程は、主に2日間の日程で大学の講義や演習を行う内容と、病院における看護学実習を見学する内容で構成した。また、授業科目を通して受講し、授業の組み立てをイメージすることが出来るような構成の日程も計画した。「教育力の向上」に視点を置いた研修として、授業設計や実習の位置づけ・組み立て等の大学教育に関する内容も取り入れた。お互いの業務の相互理解として、教員の業務の一つである研究について紹介を行った。</p>	<p>成果；今年度は、病院から大学への人事交流への研修者が7病院から10名おり、これまでの最大の参加者となった。 これは、人事交流の日程を短期間で複数回参加できるように組み立てたため、病院側としても派遣しやすくなったためと考える。「3日間の研修は長い」という昨年度の課題は解決されたと考える。又、オリエンテーションを事前に参加者全員一同で行うことで研修時間を効率よく使うことができた。 研修内容の中に実習や講義の組み立てについての講義・演習を入れたが、これにより自施設で実習を受け入れる際のイメージ作りに繋がったと考える。 又、人事交流の際に他病院の方と交流する時間が取れ、同じような規模の病院ならではの課題等について情報交換が出来ていた。 大学から病院への人事交流では、教員の研究テーマに合った施設だったので、施設だけでなく地域についても広く情報を得ることが出来た研修になっていた模様で今後の自身の研究活動に活かせる情報を得る機会ともなり貴重な経験となっていた。病院側にとっても小規模病院を対象とした研究に取り組んでいる教員と情報交換や意見交換が出来たことにより、相互理解が深まったと考える。 課題；次年度以降の実施に向けた研修内容の整理が必要である。 課題への取組方針：大学から病院への人事交流については、教員の研究活動に活かせる内容となるような計画とし、又、交流しやすいよう日程</p>	A	A

<p>⑨12月 人事交流事業の実施病院等の病院長・看護部長を招き意見交換を行う場として、人事交流評価会議を開催する。</p> <p>○12月 31年度人事交流を希望する小規模病院等の意向確認・調整</p>	<p>12月17日に人事交流評価会議を開催した。今年度人事交流を実施した7病院から、看護部長等看護管理者が参加した。会議では人事交流事業についての意見交換のほか、補助金終了後の本プログラムの今後についても意見交換が行われた。</p> <p>病院側より、大学教員の受け入れは受け入れ前にスタッフ全員で検討し準備すること自体が勉強となり有意義であった、受け入れることでお互いの気付きがあり勉強になったとの声があった。職員の派遣については、研修に参加することによって職員のモチベーションのアップに繋がると共に、自主性の芽生えに繋がっている、とのことで次年度以降も同様の実施を希望された。</p> <p>上記人事交流評価会議において、今後の人事交流事業のあり方、実施方法等について意見交換を行った。その結果、今後も人事交流に職員を派遣していくと言う病院が大部分であった。</p>	<p>調整を行う。</p> <p>病院から大学への人事交流では、学生や基礎教育への理解を深め、自施設での実習の受け入れや現任教育等に活用する能力を高める内容に整理する。</p> <p>【人事交流評価会議】</p> <p>成果：大学、病院双方にとっての人事交流事業のあり方について忌憚のない意見交換が行われた。</p> <p>課題：次年度以降の人事交流の実施について、概ね今年度の実施方法で良いとの意見であったが、具体的な実施計画については確定していない。</p> <p>課題への取組方針：人事交流評価会議や事業報告会で出された意見を元に内容や日程等の具体的な実施計画を作成する。</p> <p>今後の取組方針：上記の検討を踏まえ、実施計画を作成し、協力病院に案内を送付する。</p> <p>なお、協力病院との連携協定は今年度末で終了となるので、案内送付の前に、新たな連携協定を締結する必要がある。</p>		
--	---	--	--	--

【看護研究】

計 画	実施状況	成果と今後の課題	評 価	
			自己	委員
<p>⑩常時 小規模病院等の看護職の求めに応じて看護研究について相談にのり、研究の支援を行う。</p> <p>⑩随時 様々な段階に応じた看護研究に関する研修会を開催する。</p>	<p>昨年度からの継続は2件、新規申し込みは15件あり、現在17件の研究支援を行っている。</p> <p>3施設から研修会の申し込みがあった。各施設において、年間を通して複数回の企画であり、現在まで5回実施している（河北病院2回、米沢病院2回、舟形徳州園1回）。</p> <p>なお、6月から11月にかけて実施しているフォローアップ研修においても看護研究の支援を行っている。</p>	<p>【看護研究相談】</p> <p>成果；今年度は新規の研究相談の申し込み施設があり、看護研究相談・支援事業の周知が定着してきていることが伺える。</p> <p>課題；新規の施設からの申し込みは、その施設の状況が把握できないと、適切な支援が難しい。</p> <p>課題への取組方針；研究課題によっては、実際に施設を訪問し、看護実践や院内システムの現状を把握した上で支援を行う。</p> <p>【看護研究研修会】</p> <p>成果；依頼先の企画の要望に沿った研修会が概ね出来ている。</p> <p>課題；新規施設の研究への取り組み状況の情報が不明瞭な部分があり、施設に合った研修会の内容の組み立てが難しい。</p> <p>課題への取組方針；新規施設と十分に打ち合わせを行い支援を行う。</p> <p>成果；研究計画書の作成を終え、各々の所属施設で調査を実施し、結果の整理、分析まで至り、研修最終日には全員発表ができた。</p> <p>課題；確実に研究の展開につながっているが、個人差が大きく、個別指導に時間がとられている。</p> <p>課題への取組方針；個別指導とともに共通理解が必要なものに対しては、集団支援も併せて実施していく。</p>	S	S

<p>⑫10月 看護研究相談を受けた小規模病院の看護師が行った看護研究についての看護研究発表会を開催する。</p>	<p>10月のフォーラムに併せて開催し、口演8題、示説9題の発表があった。口演8題の演題は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 災害時・緊急時の活用を目指した透析バックの評価</li> <li>・ 当病院におけるスキンケアの実態と学習会の効果</li> <li>・ 身体拘束に対する看護師の意識改革</li> <li>・ パンフレット・術前訪問による情報提供が患者へ与える影響</li> <li>・ アルツハイマー型認知症患者へなじみの暮らしを試みて</li> <li>・ 看護師とリハビリでのベッドサイドFIM評価による情報共有</li> <li>・ 踵部おむつポリマークッションによる除圧効果と褥瘡発生</li> <li>・ 外来通院している自立した高齢者の服薬状況の実態</li> </ul>	<p><b>【看護研究発表会の開催】</b>      成果：看護研究支援を行ってきた研究が内容の差はあれ、発表までつながってきている。      課題：学会発表のレベルまでもう一息のものもある。      課題への取組方針：内容を精練し、全国の発表や論文作成まで支援していければよいと考えている。</p>		
---	--	---	--	--

【ICT活用】

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	評 価	
			自己	委員
⑬5月 学生の臨地実習においてICTを活用する。	<p>実習場所4箇所において、10日間の実習中、それぞれ各実習施設で4～9回、ICTを活用した。主な活用目的は、実習状況の確認及び実習内容に関するカンファレンスであった。学生と教員の二者間で行ったほか、実習指導者も交えて三者間でのカンファレンスも行った。さらに、実習施設2施設と大学の三地点でのカンファレンスも行った。</p>	<p>成果；教員と学生の二者間のカンファレンスのほか、実習指導者も交えた三者間においてもICTを活用することができた。又、ICT活用頻度についても昨年度と比較して増加した。さらに、実習施設2施設と大学を接続したカンファレンスにおいても活用することができ、活用の幅が広がった。</p> <p>課題；接続状況が不安な場合が見られた。</p> <p>課題への取組方針；安定した環境に向けて今後も環境整備を行っていく。</p>		
⑭随時 リカレント教育及び看護研究相談・支援においてICTを活用する。	<p>平成30年度の小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム全21単元の内、ICTでの受講可能な単元は14単元となった。ICT可能な全ての単元で受講の希望があり、同時に最多6施設と接続することができた。</p> <p>又、今年度のICTを利用して受講した者は延べ100名であった。</p> <p>看護研究相談・支援におけるICTの活用は、相談支援を行っている施設にICTを活用できるネットワーク環境が整っていないため活用に至っていない。</p>	<p>成果；画面の共有は、映像も音声もかなりクリアに出来ていた。グループワークも同じ室内で3箇所に別れて行ったが、他のグループの音声が入ったり、グループワークが中断されることなく、接続状態は安定していた。ICT受講者からも、まるで大学で受講しているようだと言われ高評価を得た。</p> <p>課題；複数の接続先の接続が終わるまで時間を費やした場合があった。又、一部の講義で大学の他の受講者の発言が、よく聞こえない、グループワークの発表や板書の文字が見えにくいとの指摘があった。</p> <p>課題への取組方針；スピーカーマイクやウェブカメラのマイク機能をさらに効果的に活用できるように工夫、検討する。大学で全員参加している時のような講義の最中の会話は、ICTでは伝え切れていないので、講義を行う側の工夫が必要である。</p>	A	A

○随時 保守・運用サービス点 検	学生の実習及びブラッシュアッププログラムにおける ICT 活用において、複数回線の通信不良は見られていたが、機器等の故障等の大きなトラブルは無かった。			
---------------------	---	--	--	--

【事業普及】

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	評 価	
			自己	委員
<p>○随時 ホームページ更新、ホームページコンテンツの見直し、修正</p>	<p>ホームページは38回（1月末現在）の更新を行った。更新内容としては、協力施設等の追加掲載や各コンテンツの見直し修正、時々の事業の案内・実施結果の記事等である。</p>	<p>【ホームページの更新】                      成果：タイムリーな更新を行うことが出来た。                      課題：今年度で補助金事業が終了となるので、ホームページのサーバー代金を工面しない場合は本事業のホームページが終了となり、閲覧できなくなる。                      課題への取組方針：本事業のホームページを大学のホームページに移設する。</p>		
<p>⑮随時 本事業で実施した各事業の成果や課題をまとめ、関係学会への発表や論文投稿を行う。</p>	<p>8月25日に第21回北日本看護学会学術集会（於：山形大学医学部）にて、「山形発・地元ナース養成プログラムの4年間の研究成果と課題」について発表した。又、12月に第38回日本看護科学学会学術集会（於：愛媛県松山市）において、「『山形発・地元ナース養成プログラム』におけるリカレント教育効果—履修証明修了生の仕事観の変化—」について発表した。                      3月には第45回山形県公衆衛生学会において、7題の発表を予定している。</p>	<p>【学会発表】                      成果：北日本看護学会学術集会に参加していた看護職は大規模病院に所属する方が多い印象で、「山形発・地元ナース養成プログラム」についての認知度は低かった。しかし、地域での医療・福祉を担う小規模病院に対する本学の取り組みについては関心をもって来ていた。                      日本看護科学学会学術集会では、複数の教育機関の教員から興味を寄せいただき、意見交換や情報交換を行うことが出来、今後のプログラムの充実に活かせる情報や意見が得られた。                      課題：実施中の調査研究がある。                      課題への取組方針：調査研究を継続して行い、今後の発表に繋げる。</p>	A	A
<p>○Jナース通信発行（年2回、10月・2月）</p>	<p>「Jナース通信第5号」を9月に発行し、10月に開催する「地元ナースフォーラム」のチラシと共に小規模病院等に送付した。第6号については、3月発行予定である。                      なお、本学の教育振興会発行の「ほほえみ」とあわせ、学生の保護者にも発送している。</p>	<p>【Jナース通信発行】                      成果：地元ナースフォーラムのチラシと同封したことにより地元ナースへの興味関心も高まり、地元ナースフォーラムへの参加に繋がった。                      課題：広報としての効果が測りがたい。                      課題への取組方針：配布方法の再検討や効率的な広報方法について検討を行う。</p>		



<p>⑨12月 本事業の協力施設の看護部長や各事業参加看護師を招き事業報告会を開催する。</p>	<p>平成30年12月17日(月)に協力施設を対象に本年度の事業報告会を実施した。参加施設は全ての協力施設の看護管理者のほかブラッシュアッププログラム参加者も参加し、合わせて24名であった。</p>	<p><b>【事業報告会の実施】</b>  <b>成果：</b>本プログラムの各事業に実際に参加された方々から様々な意見を聞くことが出来た。今後の当プログラムのあり方についても言及され、継続して実施することの意義や、ニーズがあることも再認識できた。参加施設同士においても、プログラムの活用について具体的にイメージできたようである。  <b>課題：</b>参加者が多くなり、意見交換の時間が十分にとれない可能性がでてきた。  <b>課題への取組方針：</b>意見を整理出来るように資料を事前に配布する。</p>		
<p>○3月 最終事業報告書発行</p>	<p>予算の関係で製本はしないが、従来と同様の構成でホームページに掲載することとしている。</p>			

【事業推進・評価】

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	評 価	
			自己	委員
<p>⑭9 月 各専門チームにおいて事業評価を行い、事業推進委員会に進捗状況を報告する。</p>	<p>9月の事業推進委員会において、9月末までの事業実施状況、成果、課題等を記載し、自己評価を行うよう各チームリーダーに依頼し、10月の事業推進委員会において各チームの実施状況を評価した。</p>	<p>【中間評価】 成果:事業推進委員会で各チームリーダーが進捗状況を報告することで、各チームの責任体制を明確にすることができた。</p>		
<p>⑮10 月 「地元ナースフォーラム」を開催する。</p>	<p>10月27日(土)に、地元ナースフォーラムを「大学と小規模病院等の協働による『地元ナース』の養成」をテーマに開催した。来賓等として、県健康福祉部長、文部科学省医学教育課専門官の挨拶をいただいた後、本事業に参加された方々の事例報告を行い、2名の方(山形県町村会会長(最上町長)、日本看護協会常任理事)の講演の後、テーマに沿ってフロアを交えて意見交換が行われた。 当日は170名の参加者があり、参加者のうち、120名からアンケートの提出をいただいたが、約95%の方が「良かった」という回答であった。</p>	<p>【地元ナースフォーラム】 成果:本プログラムのこれまでの成果を広く周知することができた。特に学生の参加者がこれまでよりも多く、学生の「地元ナース」への理解を深める機会にもなった。 シンポジウムを通じ、小規模病院との協働によって本プログラムが目指す“地元医療・福祉の重要性を認識し、貢献する気概を持った”地元ナースの養成が重要であることが再確認できた。又、順調に養成が行われていることが伺われた。 課題:本学の学生においての本プログラムの意図や狙い等の認知が思っているほど高くないことが伺われた。 課題への取組方針:学生に対して、各イベント時や掲示板を利用して、本プログラムの意図や狙いの周知を図る。</p>	A	A
<p>〇2 月 事業推進委員会で最終評価を実施</p>	<p>2月の事業推進委員会において各チームの事業について最終評価を行った。各事業とも「A」評価以上(看護研究相談・支援事業は「S」評価)の評価であった。</p>			

<p>⑳2月 外部評価委員会開催。評価結果をホームページで公表</p>	<p>外部評価委員会を3月14日に開催することとした。</p>			
<p>㉑12月 リカレント教育受講者や人事交流派遣者を中心に小規模病院等の看護職の交流・情報交換の場として「Jナースカフェ」を開催する。</p>	<p>11月21日(水)に開催した。午前は後藤教授から、質的研究の分析について研修会を行った。午後は山田講師から自身の取り組んだ研究「過疎地域における『つながり』を活かしたケアのしくみー山形県小国町における看護師の活動からー」の紹介があった。その後、「看護師の考える地域創生について」のテーマで意見交換を行った。参加者は4名であった。</p>	<p>【Jナースカフェ】          成果：新規の参加者がおり、継続して参加を希望しており、学びと交流の両方の要素を備えた魅力のある催しになった。          今回は教員の取り組んだ研究の報告があり、意見交換を行うことが出来、双方の相互理解の場になった。          課題：参加者が少なかった。          課題への取組方針：出来るだけ早めに実施計画を立て、広く周知を図る。</p>		

【就職先開拓】

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	評 価	
			自己	委員
<p>○4 月 学内の学生支援委員会との連携を図り、採用計画の情報収集、就職ガイダンスを実施する。</p> <p>⑩10 月 学生の保護者に、本事業の目的や実施状況等を掲載した「Jナース通信」を送付する。(年2回 2月)</p>	<p>5 月 19 日に県内 36 の施設が参加して、看護学科の 3・4 年生を対象にキャリア支援セミナーを実施した。</p> <p>なお、7 月 25 日に庄内と山形市内計 4 病院、9 月 6 日に高畠地区 1 病院を対象に、1 年生、3 年生を対象に地域医療体験セミナーを実施した。</p> <p>「Jナース通信第 5 号」と「地元ナースフォーラム」の案内を 10 月に本学教育振興会発行の「ほほえみ」の送付に同封し保護者へ送付した。第 6 号については、3 月発行の予定である。</p>	<p>成果：看護学科 4 年生 65 名中、就職希望者 62 名、進学希望者 3 名であった。県内出身者 47 名中、県内に就職が内定した者は 32 名 (68.1%) で、小中規模病院に就職した者は 2 名であった。</p> <p>課題：5 月の開催は例年通りであるが、4 年生では、すでに内定しているものがある。</p> <p>課題への取組方針：課題に対して学生支援委員会、教務学生課等と検討したうえ、より効果的なキャリア支援セミナーの企画を考える。</p> <p>課題：1 年生を対象とした地域医療体験セミナーは初めてであったが、多様な病院の活動に触れ、興味深く参加していた。</p> <p>課題への取組方針：来年度以降も実施していく。</p>	A	A

公立大学法人山形県立保健医療大学「地元ナース養成プログラム事業」推進委員会規程

平成 27 年 4 月 7 日

規 程 第 1 1 号

(趣旨)

第 1 条 この規程は、公立大学法人山形県立保健医療大学の組織及び運営に関する規則（平成21年規則第 1 号）第10条第 2 項の規定に基づき、本学が文部科学省から助成を受けた課題解決型高度医療人材養成プログラム「山形発・地元ナース養成プログラム」事業（以下「養成事業」という。）の確実な推進を図るため設置する、養成プログラム事業推進委員会（以下「事業推進委員会」という。）に関し必要な事項を定めるものとする。

(組織)

第 2 条 事業推進委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 学長
- (2) 教職員の中から学長が指名する者
- 2 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員のうちから理事長が指名する。
- 3 学長は、養成事業を総理する。

(所掌業務及び会議)

第 3 条 事業推進委員会は養成事業に係る次の業務を所掌する。

- (1) 養成事業の進行管理
- (2) 養成事業の年次計画の作成
- (3) 次条に定める専門部会間の調整
- (4) 前号の専門部会の事業評価
- (5) 養成事業の外部評価の実施
- 2 事業推進委員会の会議は、養成事業に関わる担当者全員の参加とし、原則毎月開催する。

(専門部会)

第 4 条 事業推進委員会に、養成事業を着実に推進するための専門部会として、次のチームを置く。

- (1) 学士課程教育チーム
- (2) リカレント教育チーム
- (3) 看護研究相談・支援チーム
- (4) ICT活用チーム
- (5) 人事交流チーム
- 2 前項各号のチームのリーダー及び構成員は学長が定める。
- 3 専門チームは定期的に運営会議を開催する。

(事業推進責任者等事業推進体制)

第 5 条 学長は、養成事業の円滑な実施を図るため、事業推進責任者を定めるとともに、事業推進に関わる教職員の役割等事業推進体制を明示するものとする。

(事業の評価等)

第6条 各専門チームは概ね6か月に1度、自ら事業点検を行うものとする。

2 事業推進委員会は、年1回、各専門チームの事業点検に基づき事業評価を行うものとする。

3 事業推進委員会は、年1回、次条に定める外部評価委員会を開催し、養成事業についての外部評価を受けるものとする。

(外部評価委員会)

第7条 養成事業の実施状況等について、学外からの評価を受けるため、外部評価委員会を設置する。

2 外部評価委員会の委員は行政、医療施設、関係団体等から選任するものとし、学長が委嘱する。

(その他)

第8条 この規程に定めるものの他、養成事業の推進に関し必要な事項は、事業推進委員会で定める。

附 則

この規程は、平成27年4月7日から施行し、課題解決型高度医療人材養成プログラムの終了をもって廃止する。

## 山形県立保健医療大学看護実践研究センター運営規程

平成 26 年 10 月 31 日

規 程 第 1 8 号

(趣旨)

第 1 条 この規程は、公立大学法人山形県立保健医療大学の組織及び運営に関する規則（平成21年規則第 1 号）第 7 条第 2 項の規定に基づき、山形県立保健医療大学看護実践研究センター（以下「実践センター」という。）の運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第 2 条 実践センターは、県内の看護職を対象に看護継続教育、研究指導、情報発信等を行うことにより、本県における看護実践水準の向上を図ることを目的とする。

(業務)

第 3 条 実践センターは、その目的を達成するために、次に掲げる業務を行う。

- (1) 看護職を対象とした実習指導力養成教育
- (2) 看護職を対象とした実践力向上のためのフォローアップ教育
- (3) 看護研究に関する相談・指導等の支援
- (4) 看護実践・研究に関する情報発信
- (5) その他実践センター長が適当と認めた業務

(職員)

第 4 条 実践センターに、実践センター長及びその他必要な職員を置く。

- 2 実践センター長は、看護学科教員の中から学長が任命する。
- 3 実践センター長は、第 3 条各号に定める業務について掌理する。
- 4 実践センター長の任期は 2 年とし、再任を妨げない。
- 5 実践センター長が任期満了前に辞任し、又は欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(実践センター委員会)

第 5 条 実践センターの円滑な運営を図るため、実践センターに次の委員会を置く。

- (1) センター運営委員会
  - (2) センター実施委員会
- 2 前項の委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(委任)

第 6 条 この規程に定めるもののほか、実践センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

(施行期日)

この規程は、平成 26 年 11 月 1 日から施行する。

## 山形県立保健医療大学看護実践研究センター委員会要綱

(趣旨)

第1条 この要綱は、山形県立保健医療大学看護実践研究センター運営規程（平成26年規程第18号）第5条第2項の規定に基づき、センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）及びセンター実施委員会（以下「実施委員会」という。）の運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(運営委員会の構成等)

第2条 運営委員会は、理事（総務担当）、研究・地域貢献等推進委員会委員長、看護実践研究センター長（以下「実践センター長」という。）及び学長が指名した教職員で構成する。

2 運営委員会に委員長及び副委員長を置き、委員の中から学長が指名する。

3 第1項の委員のうち、学長が指名する委員の任期は2年とする。ただし、補欠の委員として指名された委員の任期は前任者の残任期間とする。

4 学長は必要があると認める場合は、第1項の委員の他に教職員の中からオブザーバーを指名することができる。

(運営委員会の審議事項)

第3条 運営委員会は次の事項を審議する。

(1) 看護実践研究センター（以下「実践センター」という。）の活動計画に関すること

(2) 実践センターの予算・決算に関すること

(3) 実践センターの評価に関すること

(4) 実践センターと学内委員会等との調整に関すること

(5) その他実践センターに関する重要事項に関すること

(運営委員会の会議)

第4条 委員長は運営委員会の会議（以下「会議」という。）を招集し、その議長となる。

2 会議は委員の3分の2以上の出席がなければ開くことができない。

3 会議の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

4 会議には、必要に応じ委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(実施委員会)

第5条 実施委員会は、実践センター長の下、次の各号の部会で構成するものとし、各部会はそれぞれ各号に定めた業務を所掌する。

(1) リカレント教育部会 小規模病院等に勤務する看護職を対象とした看護実践力向上のための教育プログラムの開発検討及び実施

(2) 看護研究相談・支援部会 小規模病院等に勤務する看護職の看護研究に関する相談・指導等の企画及び実施

(3) ICT活用部会 リカレント教育及び看護研究相談等におけるICTの活用の検討及び機器等の管理運営

(実施委員会の構成等)

第6条 前条各号の部会のメンバーは、教職員の中から学長が指名するものとし、うち1名を部会長に任命する。



2 各部会の会議は定期的に部会長が招集するものとする。

(部会長会議)

第7条 実践センター長は、必要に応じ各部会長で構成する部会長会議を開催するものとする。

2 部会長会議では、各部会における実施状況の報告や各部会間の調整事項等について協議する。

(庶務)

第8条 運営委員会及び実施委員会の庶務は、実践センターにおいて処理する。

(その他)

第9条 この要綱に定めるもののほか、各委員会について必要な事項は別に定める。

#### 附 則

1 この要綱は、平成27年6月4日から施行する。

2 山形県立保健医療大学看護実践研究センター委員会要綱(平成27年2月3日制定)は廃止する。

3 第6条第1項の各部会のメンバーについては、「山形発・地元ナース養成プログラム事業」の助成期間にあつては、それぞれ同事業における「リカレント教育チーム」、「看護研究相談・支援チーム」及び「ICT活用チーム」のメンバーとし、部会長は同チームリーダーを充てるものとする。

平成 30 年度 事業推進委員会名簿

氏名	所属・職名	役割
前田 邦彦	理事長・学長	事業推進代表者
菅原 京子	看護学科教授	事業推進責任者
鈴木 あけみ	事務局次長（兼）総務課長	事業推進補佐
大沢 敏文	事務局教務学生課長	学士課程教育チームメンバー
鹿間 麻里江	事務局総務課 図書・調整主査	事務担当者
遠藤 恵子	看護学科長・教授	学士課程教育チームリーダー
遠藤 和子	看護学科教授	学士課程教育チームメンバー
後藤 順子	看護学科教授	看護研究相談・支援チームリーダー
沼澤 さとみ	看護学科教授	人事交流チームメンバー
井上 京子	看護学科准教授	リカレント教育チームリーダー
安保 寛明	看護学科准教授	看護研究相談・支援チームメンバー
高橋 直美	看護学科講師	リカレント教育及び学士課程教育チームメンバー
槌谷 由美子	看護学科講師	ICT活用チームリーダー、学士課程教育チームメンバー
今野 浩之	看護学科助教	ICT活用及びリカレント教育チームメンバー
渡邊 礼子	看護学科助教	ICT活用チームメンバー
齋藤 愛依	看護学科助教	人事交流チームメンバー
佐藤 志保	看護実践研究センター 特任講師	看護実践研究センターチームメンバー 人事交流チームリーダー、 リカレント教育、看護研究相談・支援、ICT活用チームメンバー
富樫 栄一	看護実践研究センター 事業推進主査	看護実践研究センターチームメンバー
設楽 幸江	看護実践研究センター 企画主任	看護実践研究センターチームメンバー

平成 30 年度 看護実践研究センター運営委員会名簿

氏名	職名
菅原 京子	運営委員長：看護実践研究センター長
伊藤 文明	運営委員：理事（総務担当）
真壁 寿	運営委員：情報・図書委員会委員長
佐竹 真次	運営委員：学生部長
遠藤 恵子	運営委員：看護学科長
後藤 順子	看護研究相談・支援部会長：看護学科教授
井上 京子	リカレント教育部会長：看護学科准教授
槌谷 由美子	ICT活用部会長：看護学科講師
佐藤 志保	人事交流部会長：看護実践研究センター特任講師
富樫 栄一	看護実践研究センター事業推進主査
設楽 幸江	看護実践研究センター企画主任

文部科学省 平成 26 年度  
課題解決型高度医療人材養成プログラム」採択事業



「山形発・地元ナース養成プログラム」  
平成 30 年度 活動報告書

平成 31 年 3 月発刊  
発行 公立大学法人山形県立保健医療大学 看護実践研究センター  
〒990-2212 山形県山形市上柳 260 番地  
TEL・FAX 023-686-6614